

第2章 京都大学医学部構内AM20区の発掘調査

内記 理 笹川尚紀

1 調査の概要

本調査区は吉田山西南麓、京都大学医学部構内の東南端に位置し、吉田橋町遺跡に含まれる（図版1-505、図1）。ここががん免疫総合研究センターの新営が予定されたため、2020年度に予定地全域の発掘調査を計画した。ところが、調査区の一帯において土壌が水銀・鉛等により汚染されていることが判明したため、土壌の汚染の程度の検査や調査の実施に向けての協議がおこなわれ、調査面積や調査時期、調査方法についての検討が重ねられた。その結果、調査を2021年12月13日ようやく開始することができ、2022年5月6日までのおおよそ4ヶ月半に渡って続した。当初の計画では1800㎡を掘削する予定であったが、汚染土壌への対策として、区画ごとに排土を仕分けして搬出する必要があり、また、ベルトコンベアの使用も制限されたため、1396㎡を掘削範囲と設定し、調査にあたった。発掘調査終了後、2022年8月31日まで発掘で出土した遺物の整理作業をおこない、その後

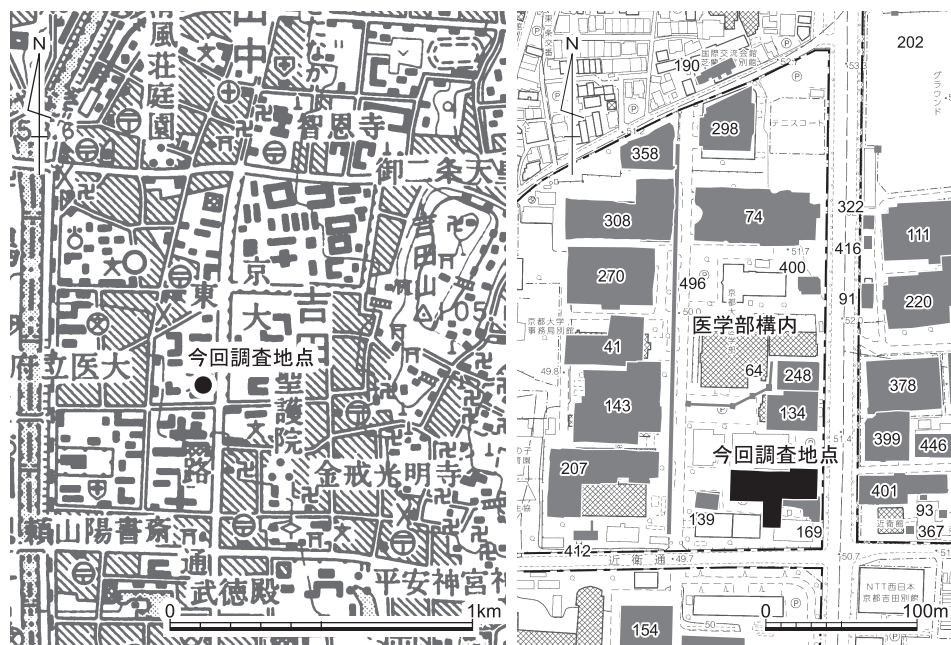


図1 調査地点の位置（左1/25000、右1/5000）

11月末まで報告書の作成にあたった。

まずは、近隣の調査成果を整理しておこう（図1）。本調査区の西に隣接する139地点における立合調査では、黄灰色シルトに掘り込む不定形土坑が確認された。出土遺物に14世紀中葉の土師器や瓦器が含まれることから、その頃の土取り穴であったと考えられる〔上田・川上・濱崎1986〕。

本調査区の北30mにある134地点の発掘調査では、一面に不定形土坑が広がっていた。遺物の内容から、14世紀中葉に埋積したものと考えられる〔五十川1986〕。

本調査区の南東に隣接する169地点においては、近世初頭の土取り穴が広がる様子が確認された。それらの遺構から出土した遺物には江戸時代前期の遺物が含まれていたが、その大半は平安時代後期から鎌倉時代にかけての12～14世紀のものであったようだ。それらの中に、平安時代後期のものと考えられる密教法具の鑄造に関連する遺物が含まれていた点は、東に隣接する吉田南構内南辺に所在したと想定されている福勝院の存在との関連から注目された〔浜崎1990〕。福勝院とは、鳥羽法皇の皇后高陽院泰子（1095－1155）が御願し、1151年（仁平元年）6月に造営された御堂である。

本調査区の東、東大路を跨いで隣接する399・401地点では、その西端において、不定形土坑群の広がり が認められた。399地点の南半から401地点でみつかった不定形土坑群は中世後半期におこなわれた土取り穴と考えられており、また、399地点の北半の土坑群は近世の土取り穴と考えられた〔伊藤・富井・内記2016, p.40, p.88〕。

以上、近隣での調査成果を確認した。東西南北のいずれの隣接地区をみても、共通して不定形土坑が広がっていた状況が確認された。それらはいずれも、黄灰色シルトを目的とした土取りによって形成された土坑であったと考えられる。よって、今回の調査においても調査区一面で黄灰色シルトの採掘を目的とした土取り穴が広がっていることが予想された。調査史上の課題としては、それらの土取りがいつの時代に、どのような年代幅をもっておこなわれたかの解明が残されている。今回の調査区はある程度広範に広がっていることから、そのような問題を解決する糸口がえられるものと思われる。

今回の報告内容の関係から、あらかじめ調査区内の10mグリッドの内容を示しておきたい（図2）。今回の調査区は、世界測地系座標のX = -108475～-108433, Y = -20281～-20222の範囲にあり、AL19c 5からAM20b 3までの地区名をもつ10m四方のグリッドを組むことができる。また、次節において扱う層位の説明にかかわり、東西畔の位置を同図中に示しておく。

層 位

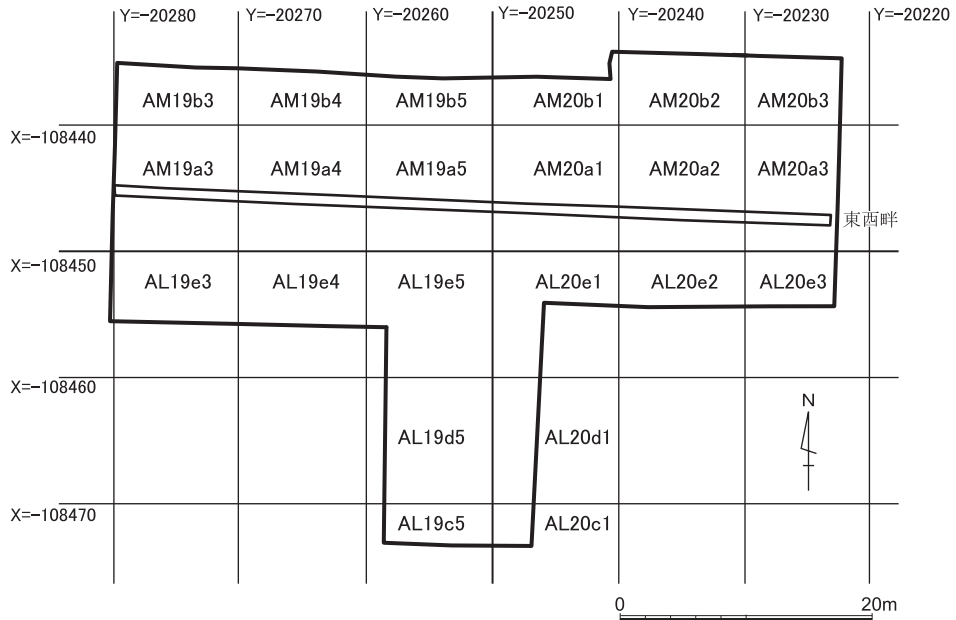


図2 調査区の地区割り 縮尺1/600

2 層 位

調査区の周りの現地表の標高は、調査区北半の四隅で51.114m（北東）、51.085m（南東）、50.915m（南西）、50.827m（北西）であり、南方張り出し部の南端2カ所では、50.81m（南東）、50.614m（南西）である。地表の地形が、概ね北東から南西へかけて緩やかに傾斜することが分かる。調査区北半の中央部に東西に走る畔（図2）を設定し、地層の観察はおもにその南面でおこなった（図3・4）。

第1層は、表土・攪乱である。畔の西端よりも西の調査区外の地点における標高が50.9mで、畔東端よりも東の調査区外での標高が51.1mであることから、第1層の厚みは、西端で80cmほど、東端で110cmほどあったことになる。第1層には、近代のレンガ造りの建物、すなわち、1901年（明治34）に建てられた医学部の解剖学教室の本館や実習室のレンガ基礎が含まれ、その時代の遺物も多く出土した。

表土・攪乱の下に示した第2層は灰褐色土の遺物包含層で、10cmほどの厚みを持つ。この第2層からは、近世の灯明皿や伏見人形、近代レンガといった、幕末頃から明治頃にか

京都大学医学部構内AM20区の発掘調査

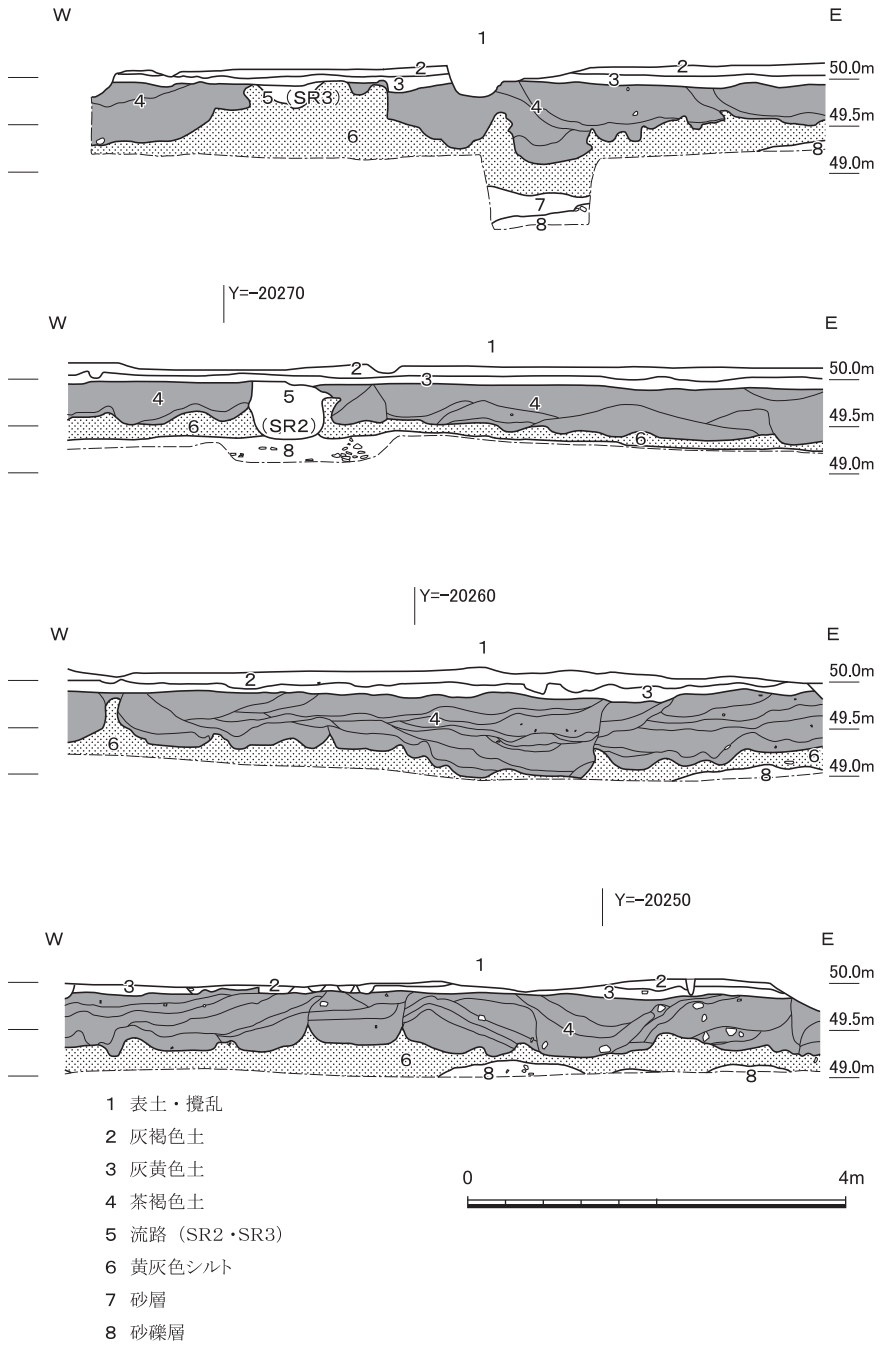


図3 東西畔南面の層位 縮尺1/80

層 位

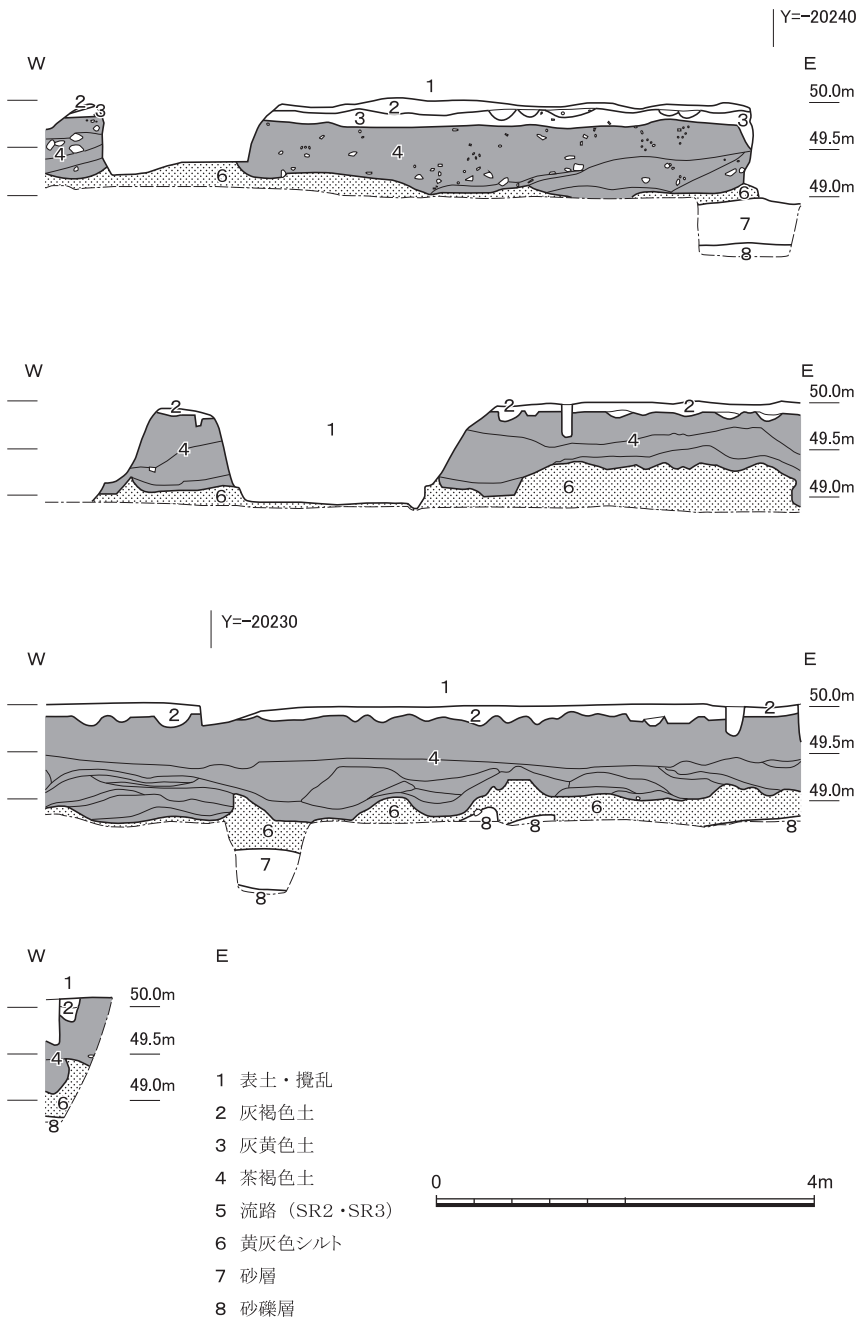


図4 東西畔南面の層位 (つづき) 縮尺1/80

けての遺物が出土した。同地に医学部解剖学教室が置かれるまでおこなわれた、耕作にかかわる土層と考えられる。なお、東西畔を設定した範囲からは外れるが、調査区北半の北辺で茶褐色土の高まりが確認されており、その段差の上では表土・攪乱層の下で黒灰色土が広がる様子が確認された。遺物から復元される時期は灰褐色土と同様に、幕末頃から明治頃にかけてである。

東西畔のY = -20240付近より西方においては、第3層として、灰黄色土の遺物包含層を認めた。その厚みは約10cmである。江戸時代後期頃の堆積と思われる、次に説明する土取りがおこなわれた時期より後の堆積である。この灰黄色土の遺物包含層や遺構は平面的に検出することが不可能であったため、全体の掘削においては灰褐色土の包含層および遺構として扱った。

これらの層の下には、主に茶褐色土を埋土とする不定形の土坑が調査区全面に広がっていた。これらの不定形土坑の埋土を、第4層として示した。埋土は複雑に堆積していたため、それを層位図に反映した。これらの不定形土坑は、黄灰色シルトを目的とした土取りにより生じた穴であったと考えられる。不定形土坑には、18世紀頃の遺物を少量含むものがあり、その頃に掘削されたと考えられるものがある。一方で、近世の遺物を全く含まないものや、埋土の掘削の過程でSX2やSX3といった14世紀頃の土器溜が検出されるものがあったことから、少なくとも同地において14世紀以前には土取りが開始されていたことが分かる。14世紀以前のある時期から18世紀にかけて、長期にわたって土取りがおこなわれたものと思われる。

不定形土坑の下には、黄灰色のシルト層（第6層）が広がる。調査区全面で検出された不定形土坑は、このシルトの掘削を目的とした土取りの結果生じたものであったと考えられる。調査区北半の西部においては、このシルト層を削るようにして、流路SR2とSR3が認められた（第5層）。これらの流路の埋土には、縄文時代後期から中世にかけての土器が含まれていたが、その9割以上が縄文土器であった。なお、土取りはこれらの流路を避けておこなわれている。

シルト層の下には、砂層（第7層）があり、さらに、その下に礫層（第8層）が広がる。第6層のシルト層の下で第8層の礫層が確認される地点もあり、第7層の砂層は部分的に堆積したものようである。

3 土取り以前の遺跡

(1) 遺構 (図版3・5・6, 図5)

今回の調査区においては、中世から近世にかけておこなわれた土取りの結果形成されたと思われる不定形土坑が全面に広がっている様子が確認された。一方で、それらの土取りの影響から免れた、つまり、不定形土坑によって完全には破壊されなかった土取り以前の時期の遺構が、わずかながら残存する(図5)。

SR2・SR3 調査区の西部において、北西から南東に走る白色粗砂による自然流路SR2が見つかった。黄灰色シルト層を削る。その上面は茶褐色土を掘削する過程で現れ、また、流路の一部は茶褐色土を埋土とする不定形土坑に削られていた。なお、後述するように、近隣の不定形土坑を掘削する過程で、14世紀の土師器溜であるSX2やSX3が検出されており、これら、SR2周辺で掘られた不定形土坑は中世の14世紀以前のものと考えられる。流路は14世紀以前のある時期に流れていたものということになる。

出土遺物の9割以上が、縄文土器であった。それ以外に、少量ながら、古代のものと思われる土師器、中世の土師器・須恵器各1点が含まれていた。縄文土器の中には後期初頭から晩期のもが含まれていたが、その中でもとくに、北白川上層2式、つまり、縄文時代後期前葉頃の縄文土器が割合として多い。よって、この流路は縄文時代後期に形成された可能性が高い。流路内で見つかったものの、中世の土師器や東播系須恵器甕の破片は、土取り時に混入したものと考えておきたい。なお、縄文時代後期前葉頃の縄文土器が集中して出土する状況は、病院構内の各地で確認されている〔千葉・富井・井上2007等〕。

調査区の西北部では、SR2から分岐したと思われる流路SR3が見つかった。SR2と同じ時期のものと考えられる。

SX4 SX4は、調査区の西北部において不定形土坑の埋土を掘削する過程で検出された土師器溜である。土取り以前の遺構である。完形の土師器が並べられた状態で検出され、それらを取り上げると、その下からも次々に土師器が現れた。遺構を掘り下げる過程で、元々は直径2m、深さ1.5mほどの大きな円形の遺構であったことが分かった。この遺構から出土した遺物は中世の土師器である。C類の土師器が主体的に含まれ、D類の土師器もわずかながら混じる。C類土師器が用いられた12世紀頃の遺構であり、D類土師器が少し含まれることから、12世紀でも後半頃の様相を伝えるものと考えられる。

SX5 調査区の中央部において、土取り穴に削られた土師器溜が検出された。四

方を土取り穴で破壊されており、外形にかかわる情報は乏しいが、東西の長さは約1.7mあり、南北の長さは2m以上あったと考えられる。土師器が並べられた状態で検出され、その下からも完形の土師器が見つかった。遺構自体は浅く、深さは約30cmであった。出土した土師器の中ではD類のものが主体をなしており、C類も含まれる。13世紀を中心とする時期の遺構であることがわかる。SX5の周りでは、やはり不定形土坑に一部を破壊された小穴SP27・SP28が見つかった。

SX51 後述するように、不定形土坑の中には、埋土に集石を伴うものがある。それらのうち、SX4のやや東で検出された集石SX15を除去したところ、集石の下から土師器溜SX51が見つかった。出土した土師器はC₄類を主体とする。完形の土師器は含まれないことから、後世の土取りに際して二次的に堆積したものである可能性が高いが、SX4の周辺において、12世紀頃に人々の営みがおこなわれていたことの証左の1つとなると考えられるため、ここで触れておく。

SE4 調査区の中央部において、不定形土坑を掘削する過程で、井戸が検出された。石組みの井戸であるが、その石組みはほとんど失われていた。やはり、土取りの影響を受けたものと思われる。東西幅は約2.3m、深さは約1.8mで、下部の約30cmのみ石組みが残存していた。下部では方形（一辺60cm）に復元される木枠の痕跡がわずかに認められた。井戸の掘削の過程で、D類の土師器のほかに、近世の磁器や陶器が見つかった。近世の遺物は後の土取りに伴うものである可能性が高い。井戸の裏込めや木枠内からは褐色の土師器小片が出土している。井戸自体は13世紀頃に作られたと考えておきたい。

SX61 調査区の中央部北西寄りの地点で、埋土に炭化物や焼土片を多く含む遺構が検出された。東西幅は約2mで、遺構の南部が土取りによって壊されてしまっているため、南北幅は分からない。西部においては、平面形でU字形に遺構が展開しているように見受けられた。U字形の溝部分の幅は、約25cmであった。埋土の質から考えて、鑄造にかかわる遺構の一部であったかもしれない。出土した土師器の中にはE類のものや灰白色の凹み底の小椀が含まれていた。14世紀頃の遺構と考えられる。

SX64 調査区の東部において、方形の浅い集石遺構が検出された。灰色の土を埋土とする。東西の長さは約80cmで、深さは約15cmである。北よりにおいては、円形の小穴が確認された。小穴の直径は約25cmで、深さは10cmに満たない程度であった。土師器が出土したが、D類のもののほか、灰白色の小椀が含まれていた。13世紀後半頃の遺構であったと考えられる。

土取り以前の遺跡

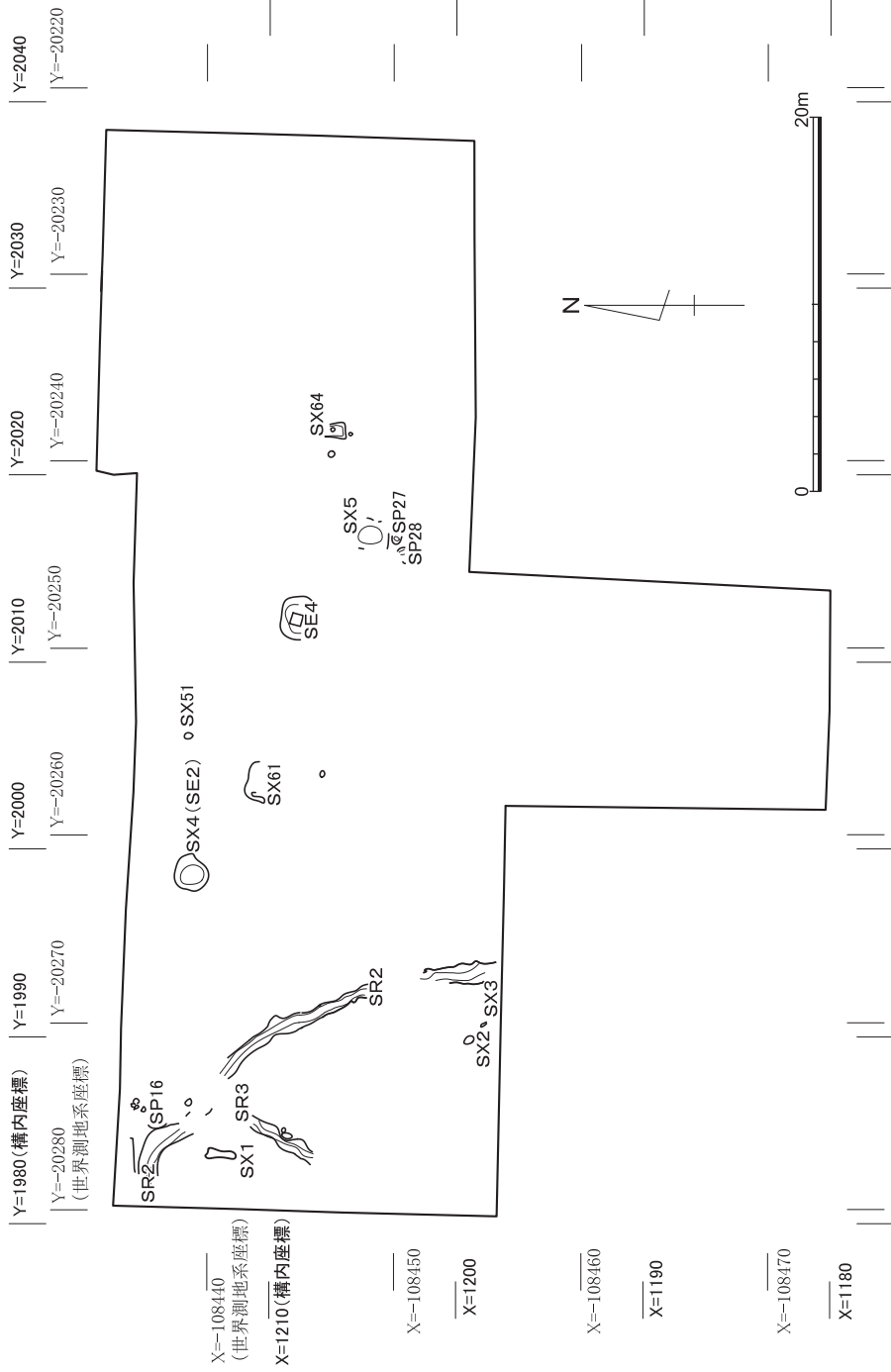


図5 土取り以前と土取り後の時期の遺構 縮尺1/400

京都大学医学部構内AM20区の発掘調査

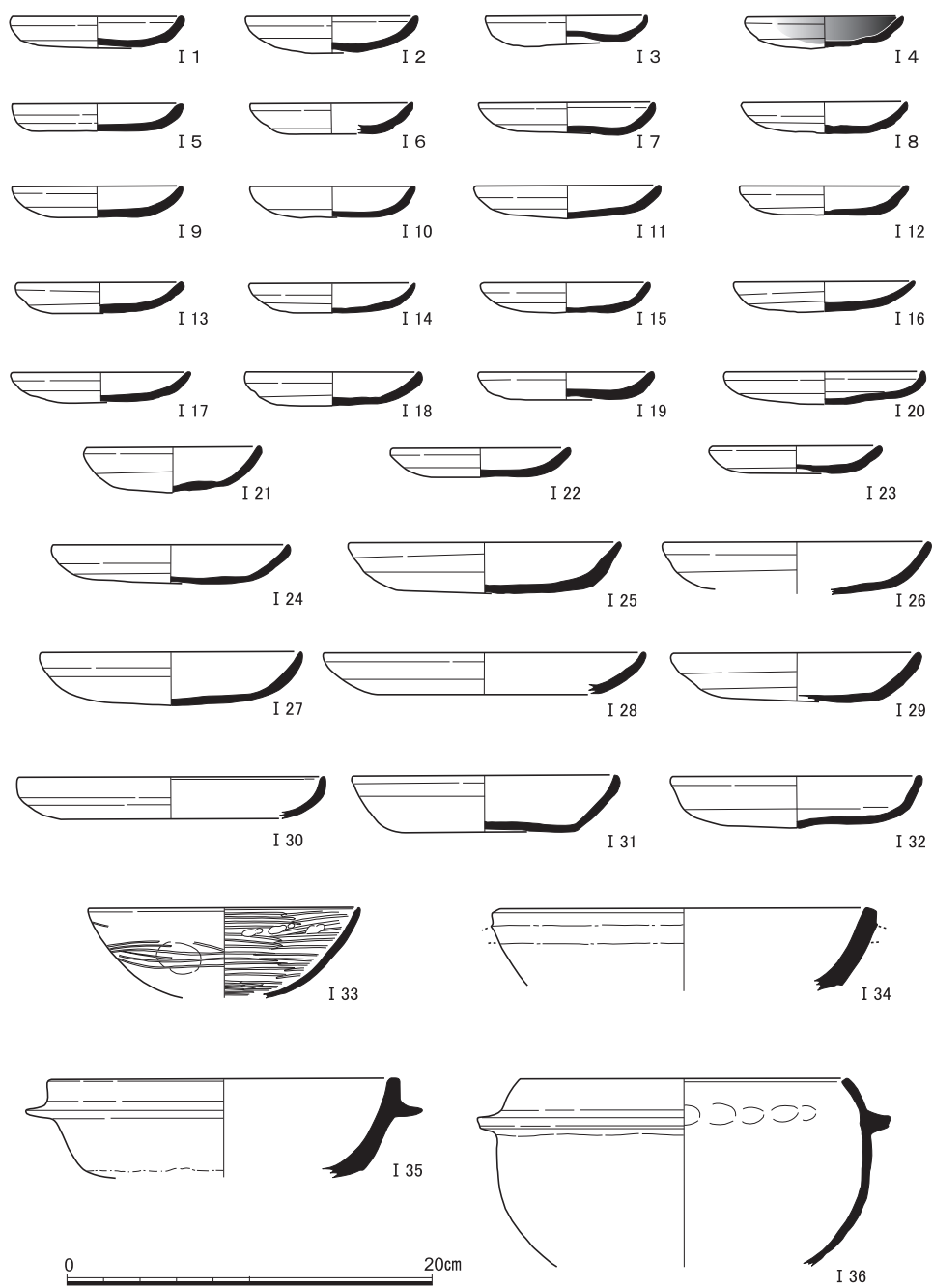


図6 SX 4 上部出土遺物(1) (I 1~32土師器, I 33~36瓦器)

土取り以前の遺跡

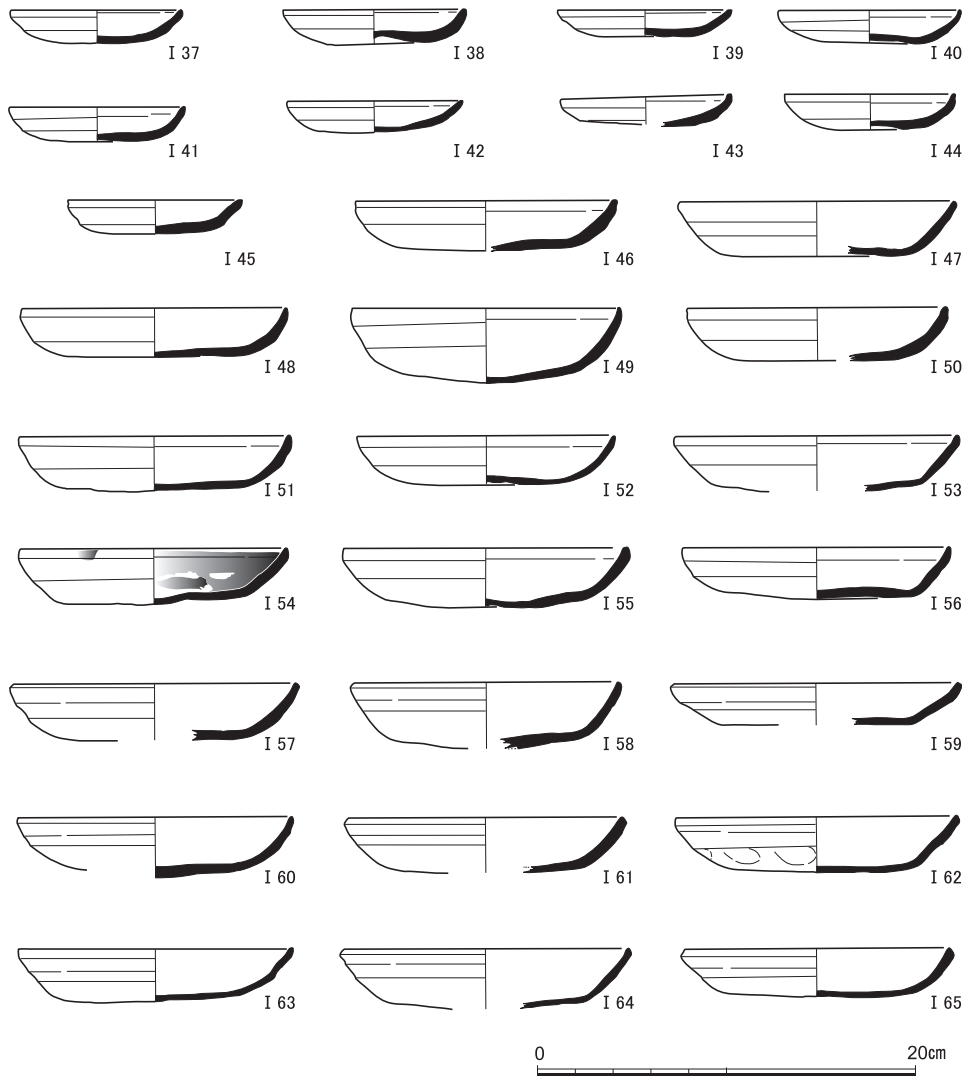


図7 SX 4 上部出土遺物(2) (I 37~I 65土師器)

(2) 遺構出土の遺物 (図版7, 図6~13)

土取りがおこなわれる以前に形成された遺構から出土した遺物を示す。

SX 4 出土遺物 (I 1~I 125) SX 4は深さのある遺構であるため、ここでは、SX 4 上部出土遺物 (I 1~I 65), SX 4 下部出土遺物 (I 66~I 105), SX 4 底部出土遺物 (I 106~I 125) の順に報告する。煤付着箇所をトーンで示す (以下同)。

京都大学医学部構内AM20区の発掘調査

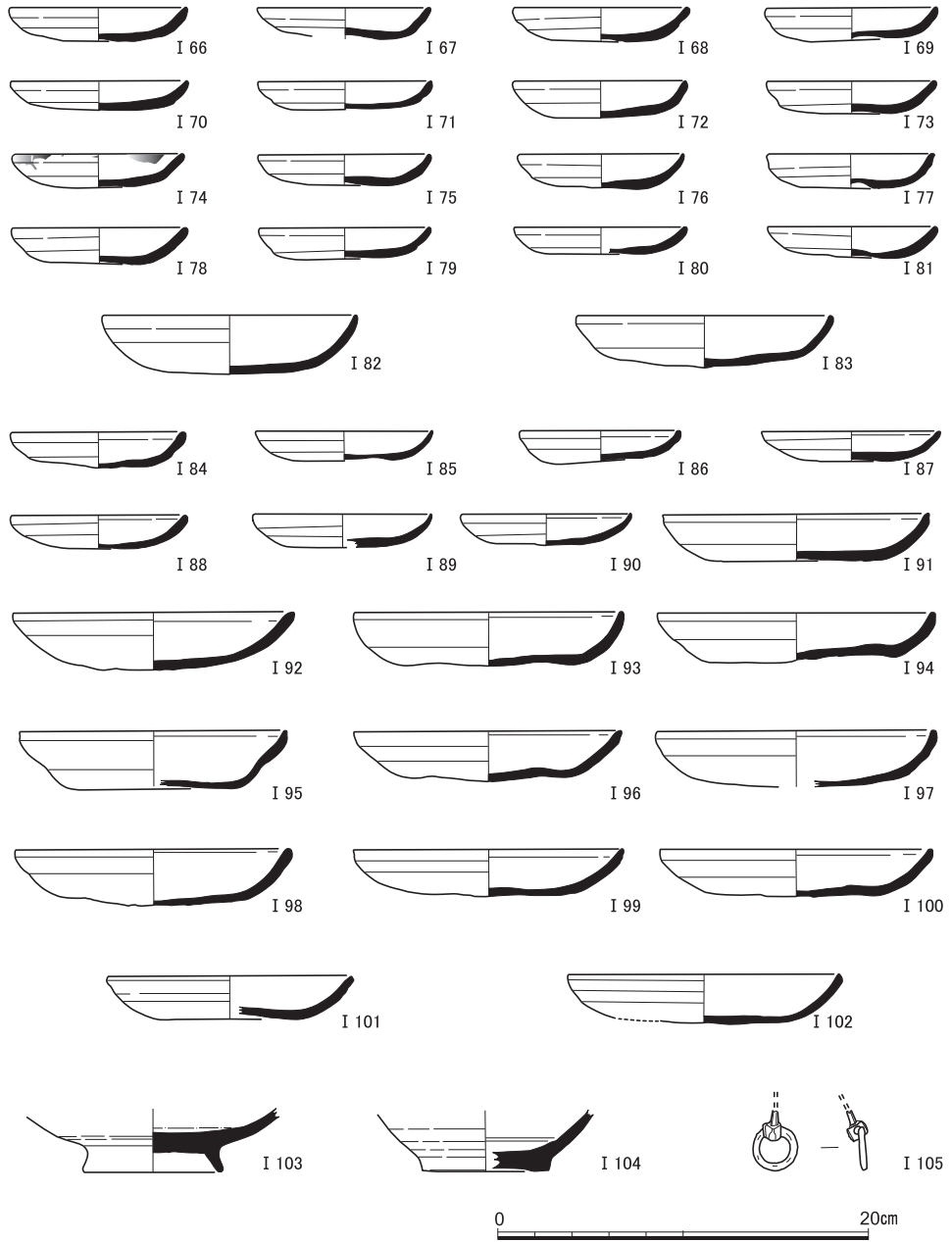


図8 S X 4 下部出土遺物 (I 66~ I 102土師器, I 103灰釉系陶器, I 104白磁, I 105青銅製品)

土取り以前の遺跡

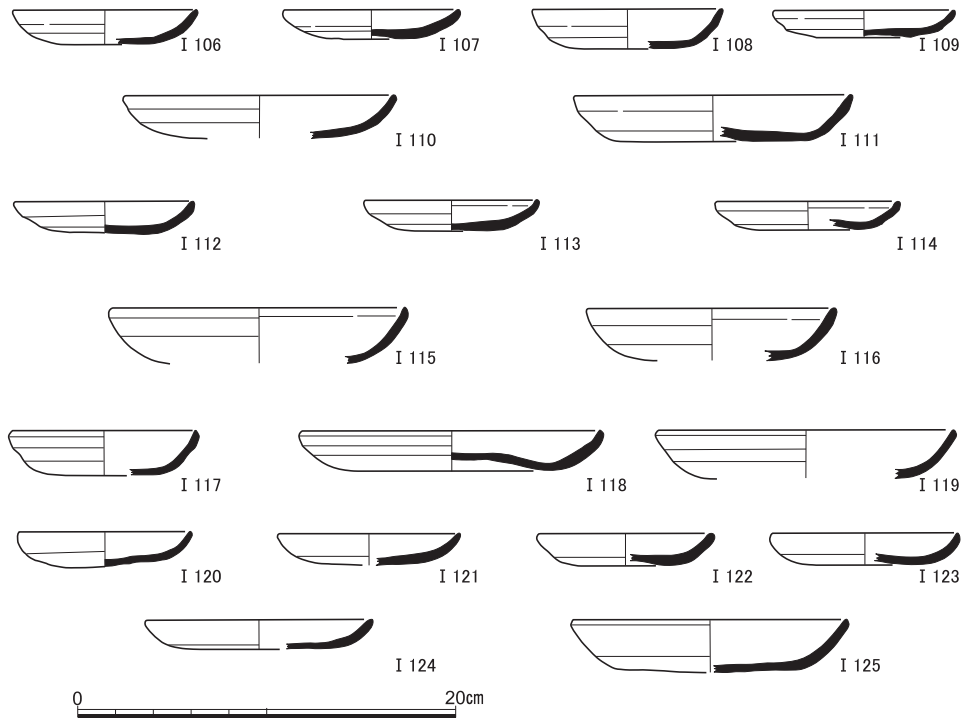


図9 SX 4 底部出土遺物 (I 106～I 125土師器)

SX 4 上部から出土した遺物のうち、I 1～I 32・I 37～65は土師器の皿である。I 1～I 32はC₃類、I 37～I 56はC₄類、I 57～I 65はC₅類である。I 33～I 36は瓦器である。I 33は椀、I 34～I 36は羽釜である。I 34においては、鏝が欠損する。

SX 4 下部から出土した遺物のうち、I 66～I 102は土師器の皿である。I 66～I 83はC₃類、I 84～I 100はC₄類、I 101・I 102はC₅類である。I 103は灰釉系陶器椀の底部である。I 104は白磁の底部である。I 105は青銅製品である。把手部分であり、装飾金具の一部と考えられる。

SX 4 底部から出土した遺物はすべて土師器である。I 106～I 111はC₃類、I 112～I 116はC₄類、I 117～I 119はC₅類、I 120～I 124はD₃類、I 125はD₄類である。

以上のように、SX 4 から出土した遺物の中では、C類に分類されるものが圧倒的多数を占める。底部においてD類の土師器も混ざることから、12世紀のうちでも後半にかかる時期の一括資料と考えることができる。

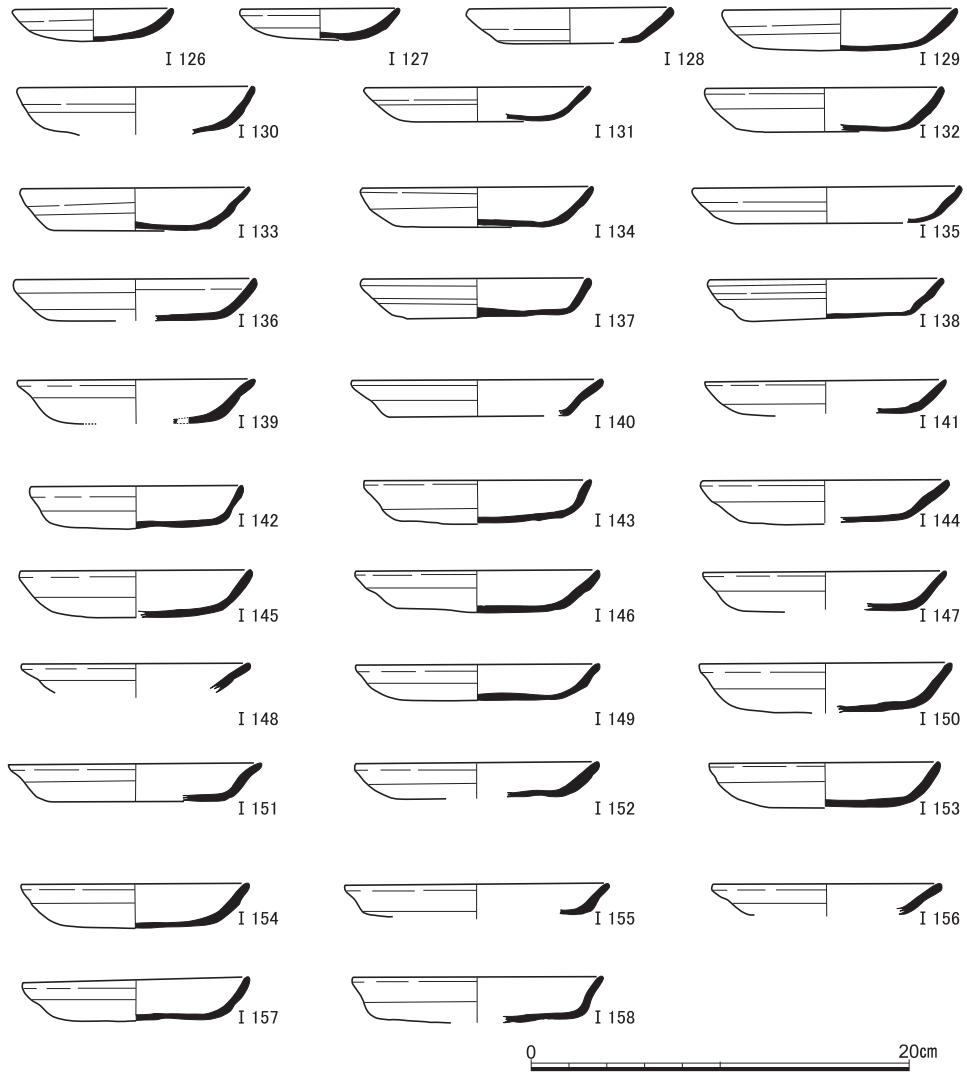


図10 S X 5 出土遺物(1) (I 126~ I 158土師器)

S X 5 出土遺物 (I 126~ I 201) I 126~ I 194は土師器である。I 126~ I 135はC₃類, I 136はC₄類, I 137・I 138はC₅類, I 139~ I 158はD₂類, I 159~ I 183はD₄類, I 184~ I 190はD₅類, I 191・I 192はE₂類, I 193・I 194は灰白色の土師器である。I 195・I 196は瓦器で, I 195は羽釜, I 196は鍋である。I 197~ I 199は須恵器で, いずれも播鉢の破片である。I 200は灰釉系陶器の鉢で, I 201は白磁碗の底部である。

土取り以前の遺跡

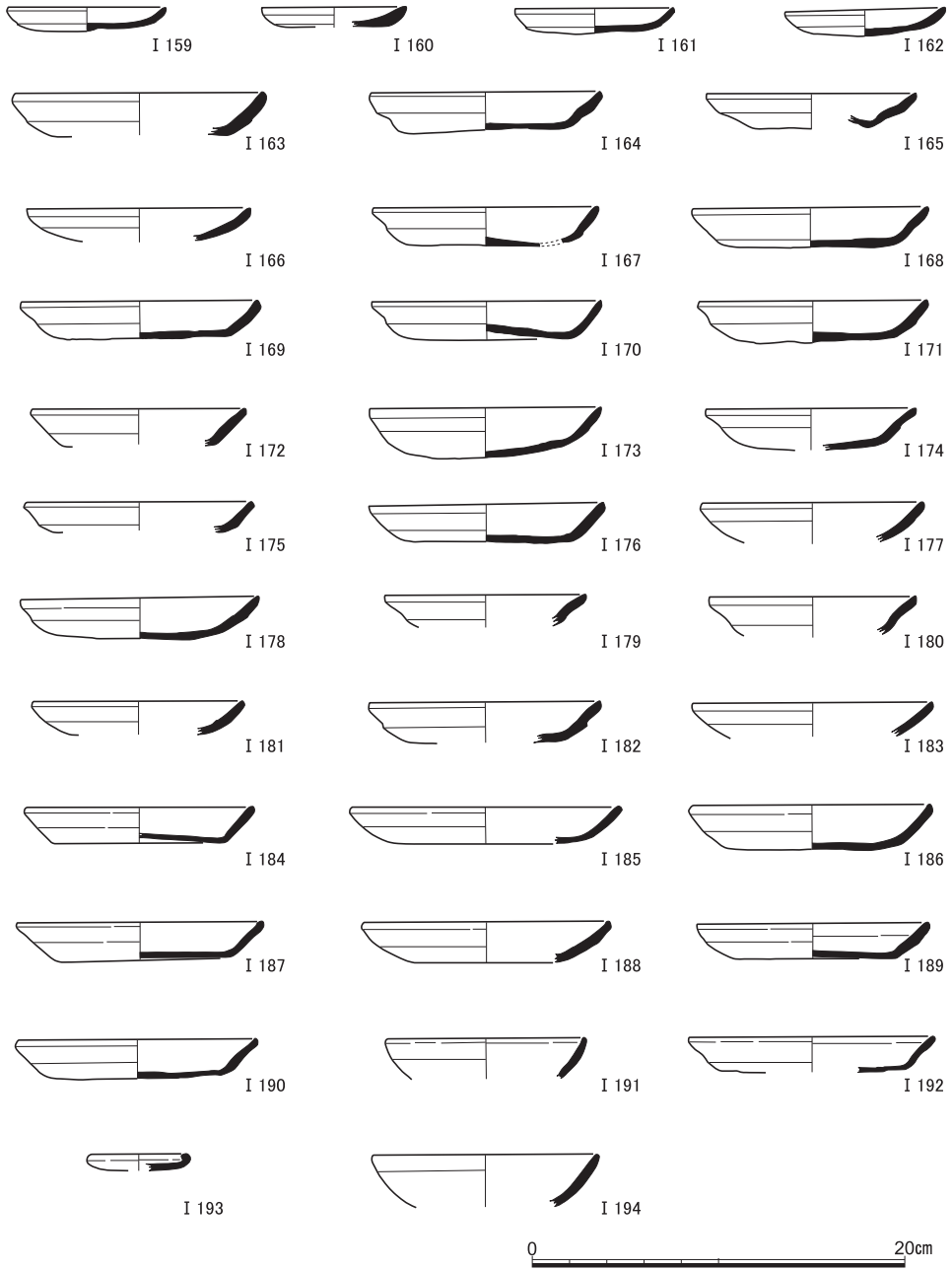


図11 S X 5 出土遺物(2) (I 159~ I 194土師器)

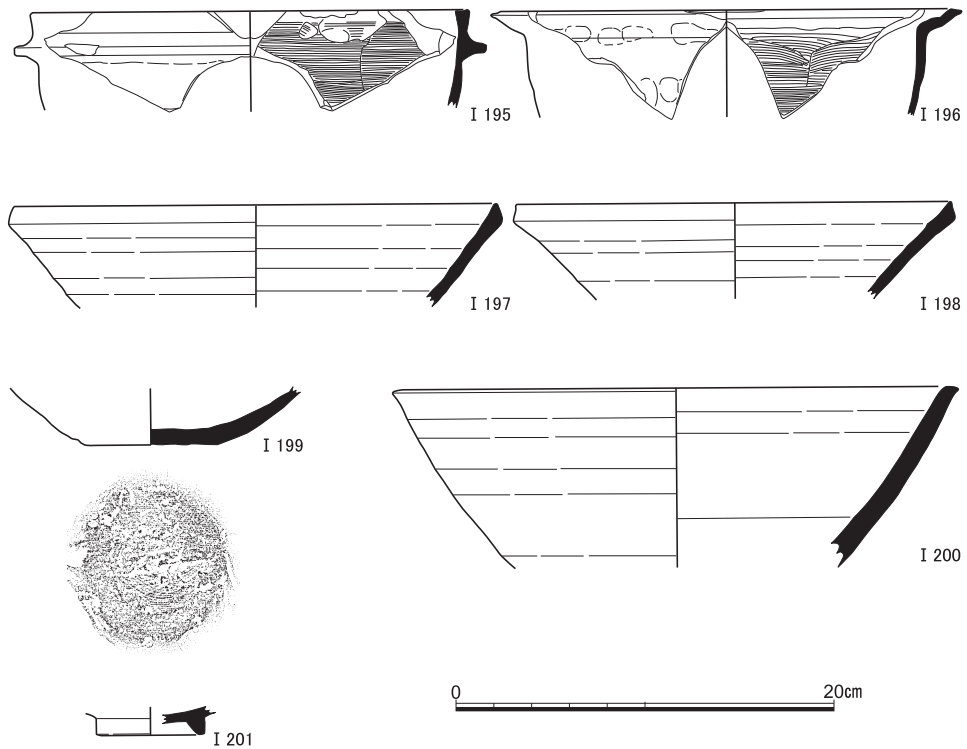


図12 S X 5 出土遺物(3) (I 195・I 196瓦器, I 197～I 199須恵器, I 200灰釉系陶器, I 201白磁)

S E 4 出土遺物 (I 202～I 206) ここでは実測することが可能であったS E 4 上部出土遺物を報告する。I 202～I 204は土師器で、I 202・I 203はD₃類、I 204はD₄類である。I 205は磁器染付小椀、I 206は陶器の底部である。外面底には「福次」の刻印がある。S E 4の上面も周辺も、不定形土坑によって破壊されていた。これら遺構の上部から出土した近世の遺物は、不定形土坑の掘削に伴うものであった可能性が残される。井戸の形成や使用の時期にかかわる遺物として、井戸の裏込めや木枠内から褐色系の土師器の小片が出土した。上部出土遺物の中にD類の土師器が含まれていたことから考えて、これらの低位から出土した土師器片はD類のものであった可能性がある。井戸はD類の盛行時期、すなわち13世紀頃に作られたものであったと考えておきたい。

S X 61 出土遺物 (I 207～I 210) I 207～I 209は土師器である。I 207は灰白色の凹み皿、I 208は褐色の受け皿、I 209はE₁類の大皿である。I 210は瓦器の小椀である。E類の土師器が出土していることから、S X 61は14世紀頃の遺構と考えられる。

土取り以前の遺跡

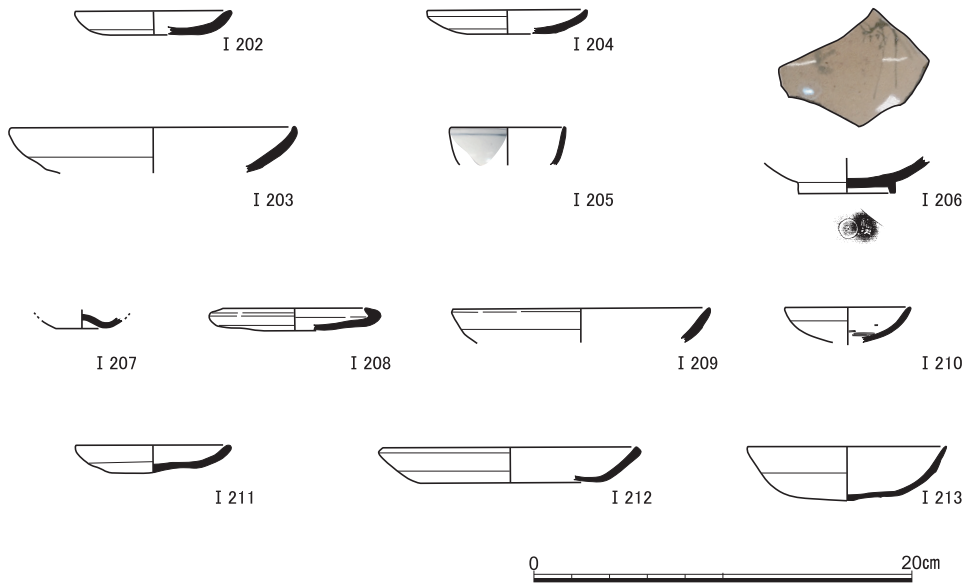


図13 S E 4 出土遺物 (I 202～ I 204土師器, I 205磁器, I 206陶器), S X 61出土遺物 (I 207～ I 209土師器, I 210瓦器), S X 64出土遺物 (I 211～ I 213土師器)

S X 64出土遺物 (I 211～ I 213) I 211～ I 213は土師器である。I 211は褐色系のD₃類の小皿。I 212は褐色系のD₅類の大皿, I 213は灰白色の大椀である。13世紀後半頃の様相を示していると考えられる。

(3) 鑄造関連遺物 (原色図版 1, 図版 8, 図14・15)

ここで、主に不定形土坑から出土したものであるが、土取り以前の土地の性格を知る上で重要と思われる遺物を取り上げておきたい。それは、鑄造にかかわる遺物である。すでに今回の調査区の南東に隣接する169地点での調査において、鑄造関連遺物として鑄型などの出土が報告されている〔浜崎1990〕。今回もまた、鑄型片やふいご羽口片が出土した。調査区全体において、鉄滓の出土が目立ったこともまた、同地の土地利用の歴史を考える上で示唆に富む。

鑄型とふいご (I 214～ I 222) I 214～ I 217は鑄型片である。I 214は169地点〔浜崎1990〕で見つかったII 48～50と共通し、密教法具の六器の口縁部の外型である。^{すき}を混ぜた胎土の粗い粘土(斜線部分)の内側に、粒子の細かな^{まね}真土(梨地部分)が貼り付けられる。小片であるため、六器の口径は復元できなかったが、169地点出土のものと同様の

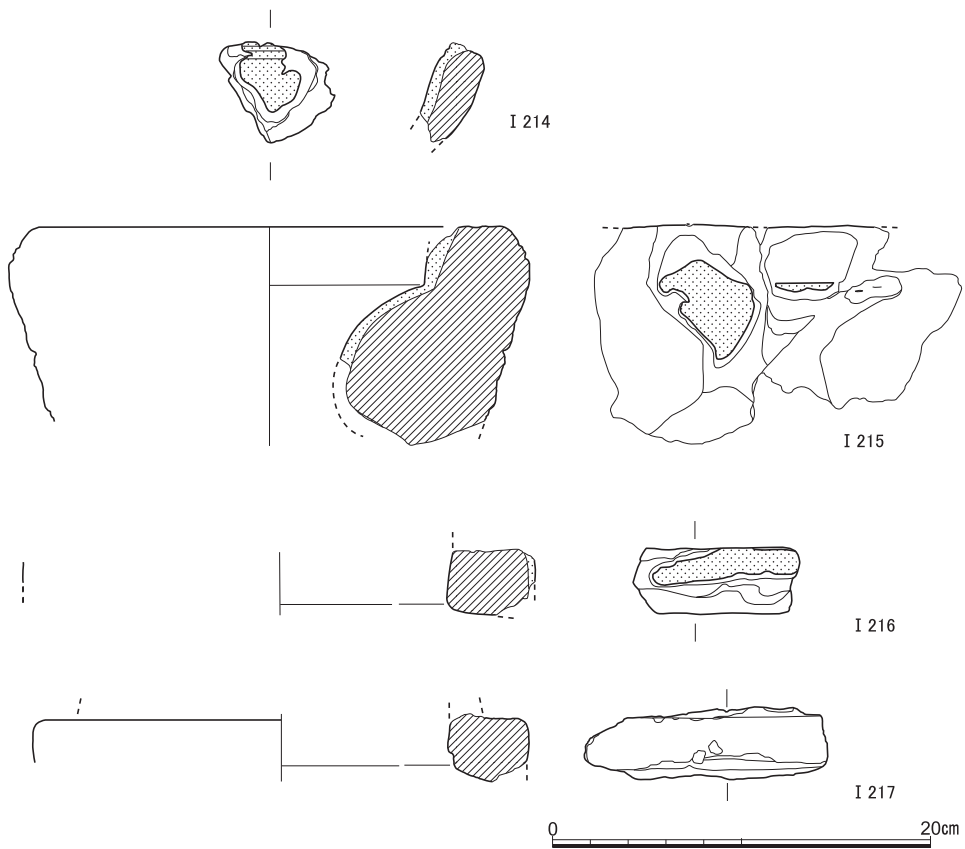


図14 鋳型

口径、つまり約11cmの口径を持つものと考えられる。I 215は華瓶の口縁部の外型と思われる。内側に弧を描くように真土が貼り付く。真土は一部しか残っていないが、頸部から肩部が鋳型片に沿って続いていた可能性がある。I 216・I 217は、華瓶などの脚の底部の内型と考えられる。これら2点は同一個体である可能性がある。I 216には外側に真土が残るが、I 217では剥離し、失われている。真土の残るI 216によれば、口径は27.2cmである。I 218～I 222はふいごの羽口の破片である。これら以外にも鋳型やふいご羽口の小片が出土している。

鉄 滓 今回の調査区における掘削において、各地点で鉄滓が目立って出土した。これらは、鋳造の過程で廃棄されたものと考えられる。総計で60,455gの鉄滓が出土した。地区ごとに見るならば、AM19a 3区で13,614gと最も多く、続いて、その南隣のAL19

土取り以前の遺跡

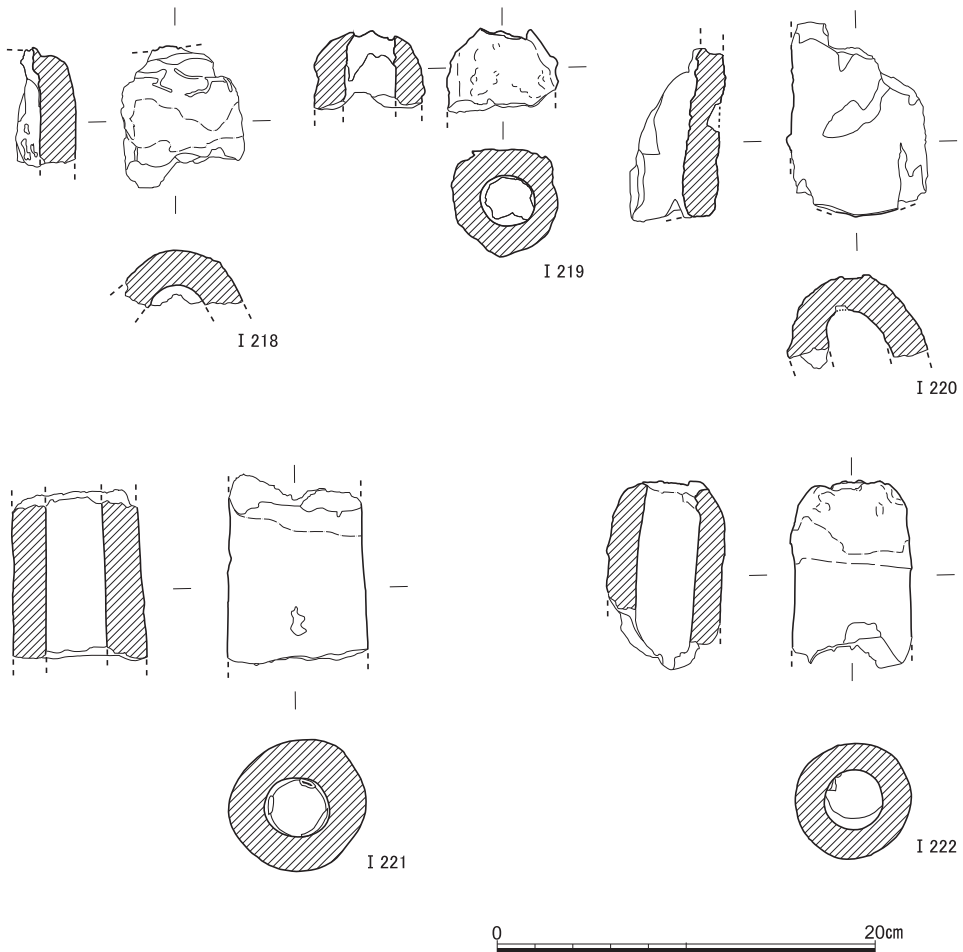


図15 ふいご

e 3区で12,239 g，東隣のAM19 a 4区で9,225 gとなる（図2）。他には，AM19 b 4区で5,561 g，AM19 a 5区で5,054 gの出土が確認され，他の地区では3,000 g未満である。調査区西端の南寄りにおいて，集中的に鉄滓が出土した状況を読み取ることができる。

焼土塊 今回の調査において，焼土塊も大量に出土しており，その内容は同じく医学部構内の270地点（図1）でおこなわれた調査で出土したものと共通する〔伊藤2003 a：II 558～572〕。建物の壁土などが熱を受けて崩落したものと考えられるが，鑄造関連遺物が見つかる場所の近辺で，このような焼土塊が多数出土している点は特筆される。

鉄製品 今回の調査区において，170点以上の鉄製品が見つかった。そのほとんど

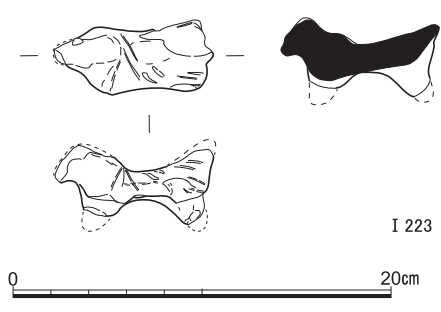


図16 土馬

が釘であった。これらの鉄製品の中には、この調査区で制作されたものも含まれているかもしれない。

(4) その他の遺物 (図版9, 図16)

不定形土坑の中から見つかった、土取り以前の時期の遺物として、縄文土器、弥生土器、古代土師器・須恵器・緑釉陶器・白色土器・瓦などがあつた。頭部の失われた土馬の破片

(I 223) が出土したほか、8世紀頃のものと考えられる製塩土器片なども一定数出土している。これらの出土遺物は、土取り以前において同地に弥生時代や平安時代の遺構が存在したことを示唆している。各時代において同地が重要な役割を担っていた可能性が高いことが分かる。

4 中・近世における土取りとその後

(1) 土取りに伴う不定形土坑 (図版3, 図17・18)

今回の調査区の全面において、不定形の土坑が認められた (図17)。それらが複雑な堆積状況を示すことは、図3・4の層位図で示した通りである。ここでは、土取り穴の埋土である茶褐色土の下半分から底にかけての遺物を参考に、各地区 (図2) における不定形土坑の掘削時期を考察する。

まず、 $Y = -20250$ 以東においては、基本的に不定形土坑の下半からの出土遺物の中にも近世の遺物が混じる。中には伏見人形や「つぼつぼ」と呼ばれる伏見産の玩具も含まれている。「つぼつぼ」は18世紀第3四半期頃まで確認される遺物であり [京都市埋文研編2004 C548B-1-19; F1432-1-40~45等], また、伏見人形は18世紀以降幕末までの遺構に認められるものであるから [京都市埋文研編2004 H166-1-37等; B687-2-19~24], 土取りが少なくとも18世紀頃まではおこなわれていたことになる。

$Y = -20250$ 以西では、近世の遺物はほとんど認められない。例外的に、AM19a 4やAM19b 4, AM19b 5, AL19e 5の北辺で近世の遺物が確認されており、これらの遺物の存在から、 $Y = -20250$ 以西においても近世に土取りがおこなわれたことが分かる。

一方、上記の例外的な箇所以外の $Y = -20250$ 以西の地点においては、基本的にF類の土師器以前の土器が見つかった。ただし、AL19d 5地点においては、E類以前の土師器

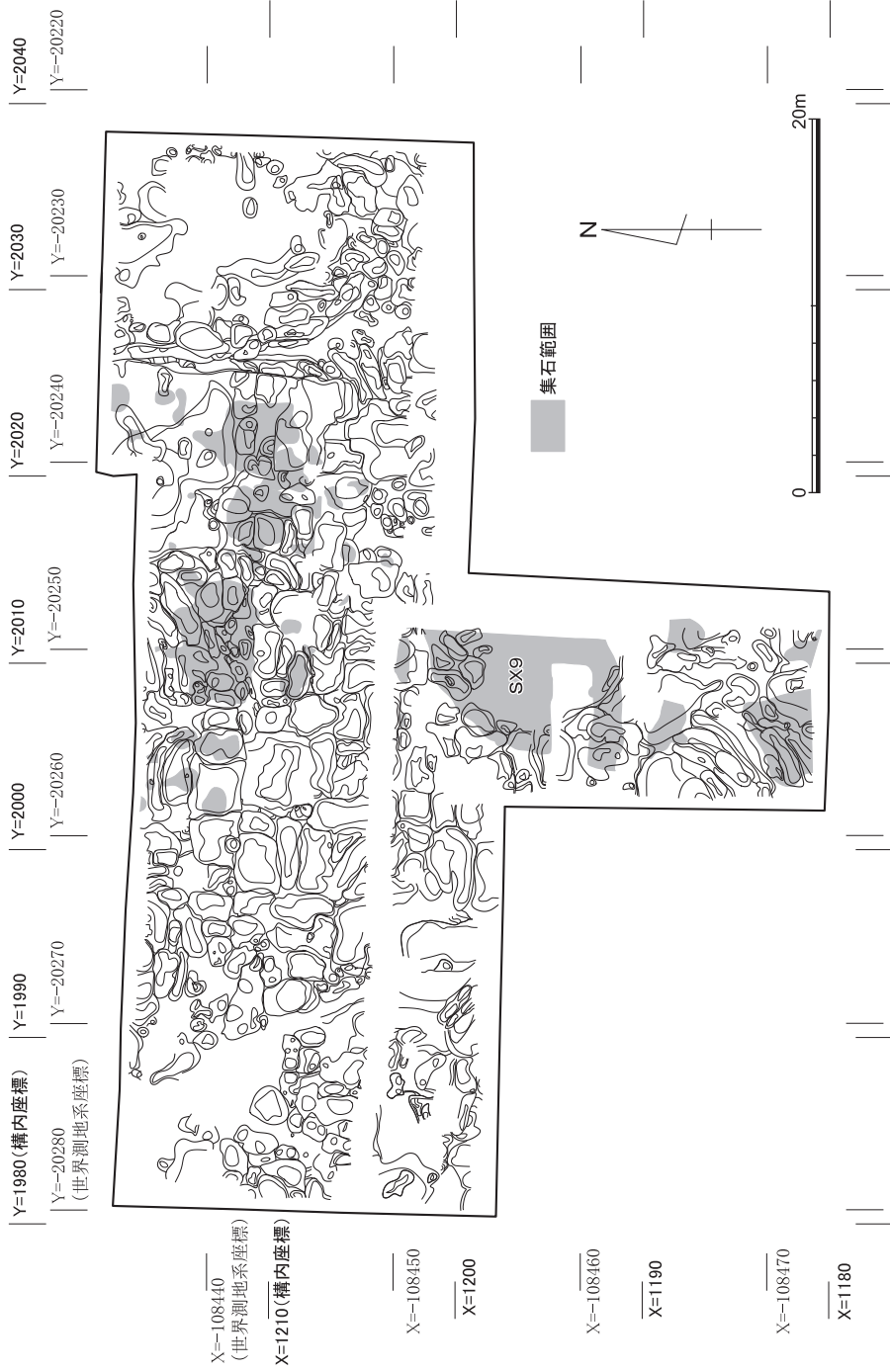


図17 不定形土坑と集石 縮尺1/400

しか認められなかった。AL19d5における土取りは、今回の調査区の中でも古い段階におこなわれたものである可能性がある。

AL19e4区においては、土取り穴の埋土中に土師器溜（SX2およびSX3）が含まれていた。後に詳述するように、これらから出土した土師器はE類を主体とする。よって、この地区内において、E類の時期以前に土取りがおこなわれたことが分かる。

以上から、今回の調査地点においては、土取りが、中世の14世紀以前のある時期から、18世紀頃までの長期にわたっておこなわれていたことが分かる。

(2) 不定形土坑に含まれる集石（図版3・4，図17・18）

不定形土坑の中には、その埋土の中に多数の拳大から人頭大の石を含むものがあつた。それら、集石の範囲を図17に示した。集石が集中して認められた調査区南部（SX9）においては、測量図を作成した（図18）。断面図に示したように、基本的にこれらの集石は、黄灰色シルトを目的とした土取り穴の埋土の中に含まれるため、これらが二次的な堆積によるものと判断せざるを得なかった。少し気になる点は、調査区南部における集石の分布が、南南西から北北東へ延びる点と、それと直交するようにして、調査区北部における分布が東南東から西北西へ延びる点である。土取り以前において、大量の石を用いる何らかの施設が同地に存在し、土取り後の埋土に現れた集石が、その名残をとどめるものである可能性があることを、ここで指摘しておきたい。

(3) 土取り後の遺構（図版6，図5）

不定形土坑の埋土の掘削の過程で、埋土中からいくつかの遺構を検出した。これらは、土取り後のある時期に、土取り穴の埋土を掘り込むように形成されたものである（図5）。

土師器溜 SX2・SX3 調査区の西南部（AL19e3）において土取り穴と思われる不定形土坑の埋土を掘削する過程で、埋土の中から土器溜 SX2・SX3 が現れた。SX2 は45cm×60cmで、SX3 は15cm×35cmである。埋土はいずれもやや黒色を帯びる。完形の土師器が多く含まれ、その天地が東西を向く点が注目される。土器のわずかな傾きから、穴の東方から西壁へ向かって放り投げられるようにして廃棄されたものと思われる。

SX2 と SX3 いずれにおいても、主体となる土師器はE類で、凹み底の小椀を含む灰白色の土師器も一定量含まれていた。なお、SX3 からはF類らしきものも1点出土している。いずれの土師器溜も14世紀頃のものと考えられる。今回の調査区における土取りが、14世紀以前にすでにおこなわれていたことの1つの証左として、これらの遺構の存在を挙げることができる。

中・近世における土取りとその後



図18 南部集石 (SX9) の平面図 (縮尺1/200) と断面図 (縮尺1/100)

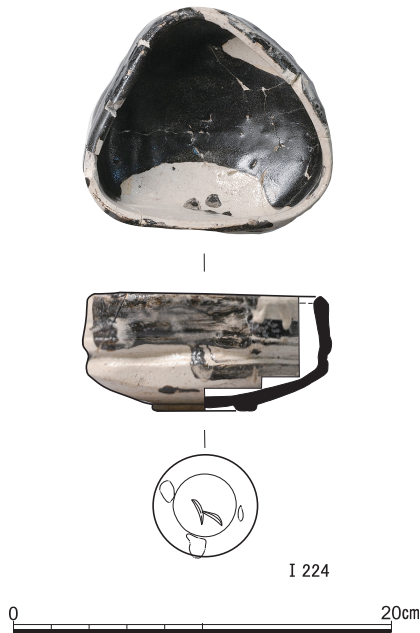


図19 不定形土坑出土黒織部 (I 224)

花紋も描かれる。柴垣勇夫氏によれば、これは黒織部梅鉢文沓茶碗で、17世紀初頭的美濃窯産である。土岐市元屋敷窯(連房式登窯)の製品と思われる。高台内のへら記号(矢印)は、土岐市久尻採集とされるものの中に認められる〔愛知県陶磁資料館編2009、箱28-14〕。このようなへら記号は、作者ではなく発注者の区別を示すとする説が有力である。

S X 2 出土遺物 (I 225~I 254) S X 2 から出土した遺物はすべて土師器皿である。I 225~I 227はE₁類、I 228~I 234はE₂類、I 235~I 237はE₃類、I 238~I 254は灰白色の土師器である。凹み底の小皿が多数含まれる。E類が主体的に含まれており、14世紀の土師器溜であることが分かる。

S X 3 出土遺物 (I 255~I 269) I 255~I 268は土師器皿である。I 255~I 259はE₂類、I 260はE₄類、I 261はF₃類、I 262~I 268は灰白色の土師器である。S X 2と同様に、凹み底の小皿が多数含まれる。I 269は瓦器のミニチュアの羽釜である。F類らしき土師器が混ざるものの、主体をなすのはE類であり、やはりS X 2と同時期の14世紀頃の土師器溜と考えられる。

S X 1 調査区の西北部で見つかった、茶褐色土に掘り込む南北方向の溝状の遺構で、その中には木材が据えられていた。遺構の大きさは南北170cm、東西40cm、検出した面からの深さは13cmである。木材は、中央やや西よりに南北方向に向けて据えられる。木材の大きさは長さ130cm、東西幅10cm、天地の高さ8.5cmである。中程に22cm×8.5cmのえぐりがある。出土遺物には近世の陶磁器が含まれる。

(4) 遺物 (原色図版2、図版9、図19・20)

不定形土坑出土黒織部 (I 224) 不定形土坑から出土した近世の陶器として、完形に近い黒織部があった。器は全体的にゆがむが、平面形は三角形を呈する。器の内面には

中・近世における土取りとその後

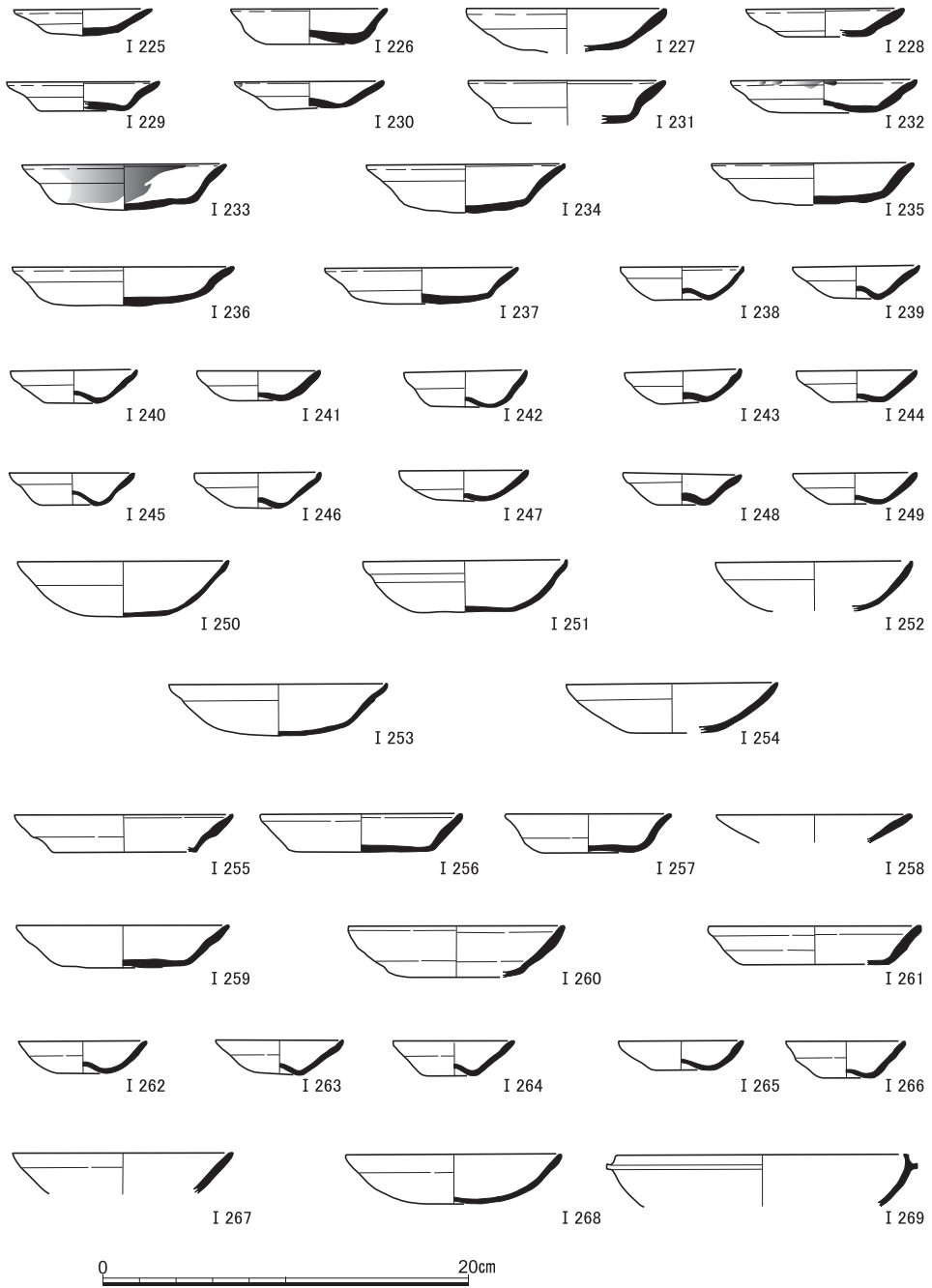


図20 S X 2 出土遺物 (I 225~I 254土師器), S X 3 出土遺物 (I 255~268土師器, I 269瓦器)

5 近世後半・近代の遺跡

重機によって表土や攪乱をとり除くと、黒灰色土と第2層の灰褐色土がみうけられた。黒灰色土は、おおよそX=1212以北、Y=2014以西のところで、灰褐色土は、それ以外のところで認められた。黒灰色土の下は、第4層の茶褐色土である。そして、灰褐色土の下は、第3層の灰黄色土、その下が茶褐色土である。ただし、本調査区の北東部では、灰黄色土が存在せず、灰褐色土の下が茶褐色土であった。灰黄色土・灰褐色土・黒灰色土は、近世後半から近代にかけての遺物包含層であると考えられる。

ちなみに、灰黄色土が広がっているところに関しては、発掘調査の期間が限られている都合上、灰褐色土とともに人力で掘削し、茶褐色土の上面で遺構の検出をおこなった。

(1) 遺 構 (図版2, 図21)

本調査区からは、複数の浅い溝(SD)とたくさんの小穴が見つかった。小穴のなかには、掘形が四角のものが多く含まれている。それらは、近世後半から近代にかけての耕作関連の遺構であると想定される。なお、第3層の灰黄色土と第2層の灰褐色土が存在しているところでは、検出された遺構の大半が灰褐色土を埋土とするものであった。

本調査区北西隅のSE1は、表土を掘削する過程で確認された井戸である。それには、漆喰製の井筒が使われていた。同じくSK1は、黒灰色土を掘りあげた後にみつかった土坑である。その覆土には、陶器や磁器の破片といった多量の遺物が混じっており、ゴミ捨て穴とみなしうる。SE1とSK1は、近代の遺構に相当する。

ちなみに、黒灰色土が広がっているおおむねX=1212以北、Y=2014以西の南側と東側は、20cmばかり低くなっており、段差がみうけられた。くわえて、東へと下がる段差は、X=1205とY=2013の交点付近からも検出されるにいたっている(段差については、図21の赤線を参照)。それらは、土地の区画を示しており、その利用の違いが土層の違いをもたらした大きな原因の1つであったと推量される。

(2) 遺 物 (図22~29)

SD22出土遺物(I270・I271) I270・I271は陶器。I270は底部外面に煤が付着する。

SK1出土遺物(I272~I302) I272~I287は陶器。I272~I275は灯明皿と灯明受皿。I274の外面半分には煤がまばらに付着する。I276は軟質施釉の小皿。内面に透明釉がかけられる。I283は皿ないしは鉢。高台には3か所の切り込みが入る。I286は乗

近世後半・近代の遺跡



図21 近世後半・近代の遺構 縮尺1/400

燭。底部外面に回転糸切り痕が認められる。I 287は花瓶か。畳付に「五九」の墨書が存する。I 288～I 301は磁器の皿・椀・段重など。I 292の口縁部内面には「通」、I 296の底部外面には「耕山」がみうけられる。I 302は先の曲がった青銅製品。

小穴出土遺物（I 303～I 318） I 303～I 311は陶器。I 303・I 304は灯明皿。前者の外面には煤が付着する。I 309は把手のある鍋。口縁部内面を露胎とする。I 312・I 313は磁器。I 314は土製の火鉢。頂部の平端面に煤が付着する。I 315は黒灰色を呈する砥石。I 316は蓮月焼。I 317は青銅製品。つり下げて用いる装飾具であろう。I 318は土製品の泥面子の芥子面。

灰褐色土出土遺物（I 319～I 331） I 319～I 325は陶器。I 319は灯明受皿。I 321は軟質施釉のミニチュアの椀。内面から体部外面の上半にかけて透明釉がかけられる。I 323は蓋。外面には灰釉が施され、また、底部には回転糸切り痕が認められる。I 326は磁器染付の皿。I 327は黄褐色を呈する砥石。I 328～I 330は土製品で、I 328が鳩笛、I 329が泥面子の芥子面、I 330が泥面子の大型の面打。I 331は寛永通宝。

黒灰色土出土遺物（I 332～I 339） I 332～I 334は陶器。I 332とI 333は灯明受皿と灯明皿。後者の外面には墨書が存する。「安」であろうか。I 334は脚部片で、底部外面に回転糸切り痕がみうけられる。I 335～I 337は磁器。I 338・I 339は土製品の泥面子の面打で、小型と中型のものである。

表土・攪乱出土遺物（I 340～I 392） I 340は土師質の植木鉢。底部の中央付近に穿孔する。底部外面には、小穴から円周にかけて一つの凹みが存する。また、体部の下端には、楕円で囲まれた「朝日園」の刻印が認められる。I 341～I 344は陶器。I 341は無釉の蓋で、五角形の底面には、四角で囲まれた「元々堂製」の刻印がみうけられる。I 343は丸善製のインク瓶。胴部下端に円で囲まれた刻印が存し、内側の円のなかに「M」、その周縁に「MARZEN'S INK」と「TOKYO」、それぞれの間に「☆」を配する。また、その下すぐの底部外面に、円で囲まれた「M」の刻印がみうけられる。I 344は甕。底部に円盤状のものを貼り付けており、その底面は露胎である。そして、そこには墨書が存するものの、それが何を表しているのか、定かにすることができない。

I 345～I 380は磁器。I 346・I 347は皿で、ともに体部外面に「解剖学教室」、底部外面に隅丸方形で囲まれた「道仙」が認められる。これらは、調査区北東隅のゴミ捨て穴からみつかったものである。重機で掘削したので、大量の遺物をすべてとりあげることができなかつたけれども、めぼしいものに関しては、できる限り拾いあげるよう努めた。なお、

近世後半・近代の遺跡



図22 S D 22出土遺物 (I 270・I 271陶器), S K 1 出土遺物(1) (I 272~ I 287陶器, I 288~ I 297磁器)

京都大学医学部構内AM20区の発掘調査

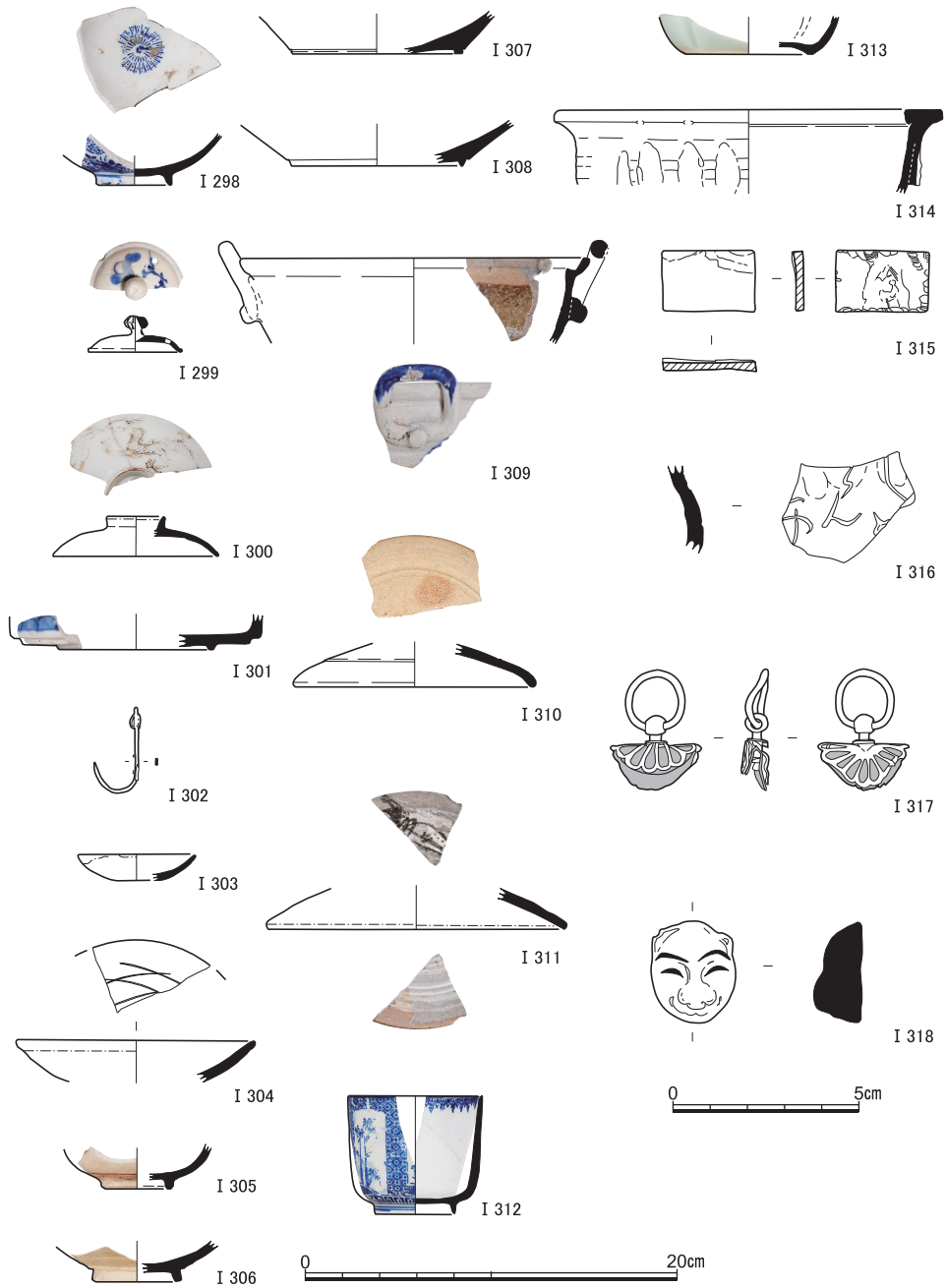


図23 SK1出土遺物(2) (I 298～I 301磁器, I 302青銅製品), 小穴出土遺物 (I 303～I 311陶器, I 312・I 313磁器, I 314火鉢, I 315砥石, I 316蓮月焼, I 317青銅製品, I 318土製品) I 316～I 318は縮尺1/2

近世後半・近代の遺跡

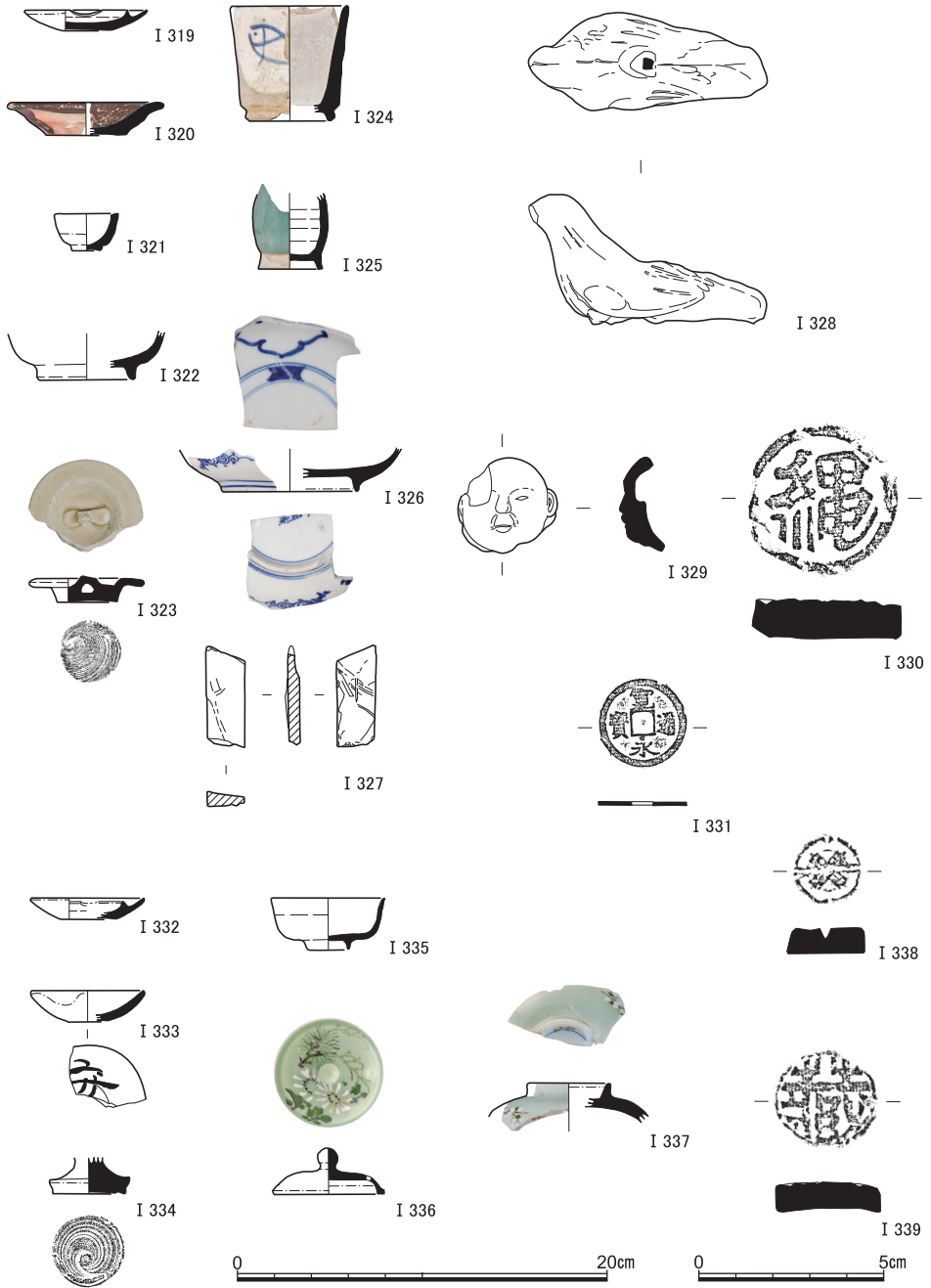


図24 灰褐色土出土遺物（I 319～I 325陶器，I 326磁器，I 327砥石，I 328～I 330土製品，I 331寛永通宝），黒灰色土出土遺物（I 332～I 334陶器，I 335～I 337磁器，I 338・I 339土製品）
I 328～I 331・I 338・I 339は縮尺1/2

そこから出土した遺物は、I 340・I 342・I 343・I 345・I 348・I 357～I 360・I 362・I 363・I 367・I 368・I 370～I 372・I 374～I 376・I 380～I 383が該当する。I 348は皿。底部外面に「万珠堂」と書き込まれている。I 349は皿。底部外面に「Y m k i t o r i」とみえる。I 350は皿。口縁端部内面に2本の緑色の線がめぐる。また、体部外面に「医院」の円形意匠、底部外面の中央に「硬質磁器」・扇の絵・「MINO YOGYO LTD」がみうけられる。美濃窯業株式会社の製品である。

I 351は染付の小椀。体部外面に、謡曲「高砂」の一節である四海波^{しかいなみ}のはじめの部分が認められる。I 352は染付の小椀。内面には色絵が施されている。また、体部外面の下端には、「念清水三郎上^{海カ}□」がみうけられる。I 353は椀。底部外面に「九谷」とみえる。I 354は椀。見込みに「大学」の円形意匠が存するものの、絵具が剥がれてしまっている。I 355は椀。体部外面の上端に3本の緑色の線がめぐる。I 356は椀。口縁端部外面に2本の緑色の線がまわり、底部外面に「岐／391」の統制番号が認められる。I 357・I 358は染付の椀。どちらも体部外面に「富貴長命」の銭貨が描かれる。I 359・I 360は染付の椀。いずれも体部外面に「富貴長命」「福寿長命」の銭貨が存し、底部外面に「山花」がみうけられる。I 361は椀。底部外面に「晋泉」とみえる。I 363～I 365は染付の湯呑茶椀。底部外面にそれぞれ「□水」「平安春峰」「玉松園／柏山製」が認められる。I 369は輪花鉢。体部外面に「北支／出征」とあって、それらの間に食事をする兵士の姿が描かれる。I 370は染付の土瓶の蓋。I 371の染付の土瓶と組み合わせ可能性が高い。

I 372～I 380は、用途不明のものが含まれるけれども、その大半が医学・医療にかかわるものであると思われる。I 373には、底部外面に「瀬／210」の統制番号がみうけられる。I 375は口縁部の端のところを露胎とし、その外面には「SCP／JAPAN」とみえる。I 376は底部外面が露胎であって、体部外面には「京都□□」が認められる。I 377の底部外面の中央には、「昭和硬質陶磁器」などが存する。I 378は乳鉢、I 379は乳棒。前者は体部内面と底部内・外面、後者は先のところを露胎とする。I 380は口縁端部内面を露胎とし、肩部に「大医」の円形意匠を有する。

I 381～I 383はガラス製品。いずれも薬に関するものであろう。I 381は白色を呈し、底部外面に「EDEN／エデン」とみえる。I 382も白色であって、底部外面に「SANTANEY & CO」とみうけられる。また、胴部にはラベルの一部が残存する。I 383は薄い緑色を帯び、胴部に京都市の徽章と「京都帝国大学薬局」が認められる。

I 384は黄灰色を呈する打製石斧。「台湾」からはじまる注記が存する。I 385は灰赤色

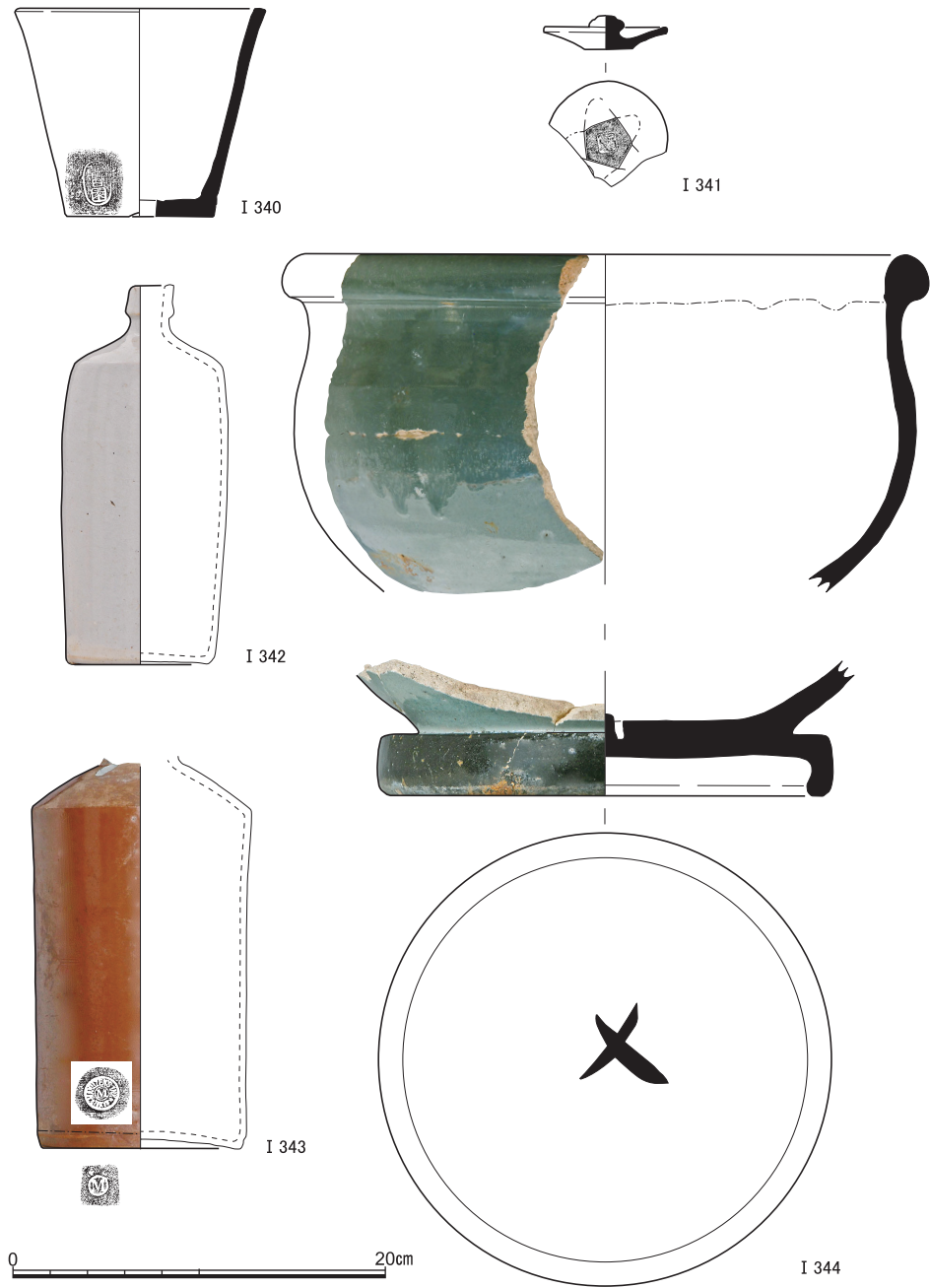


図25 表土・攪乱出土遺物(1) (I 340植木鉢, I 341~ I 344陶器)



図26 表土・攪乱出土遺物(2) (I 345~ I 350磁器)

近世後半・近代の遺跡



図27 表土・攪乱出土遺物(3) (I 351~ I 371磁器)

京都大学医学部構内AM20区の発掘調査

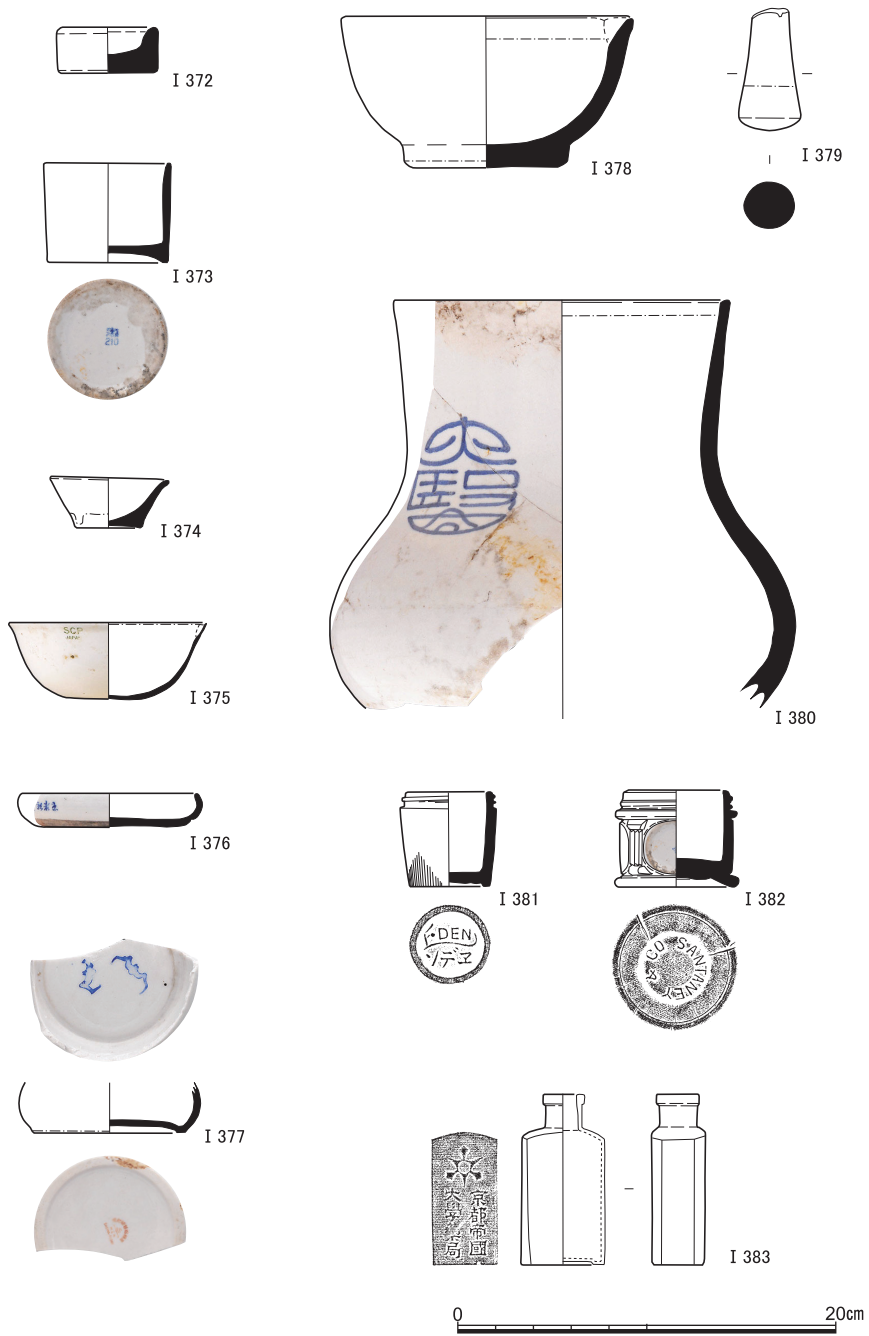


図28 表土・攪乱出土遺物(4) (I 372~ I 380磁器, I 381~ I 383ガラス製品)

近世後半・近代の遺跡

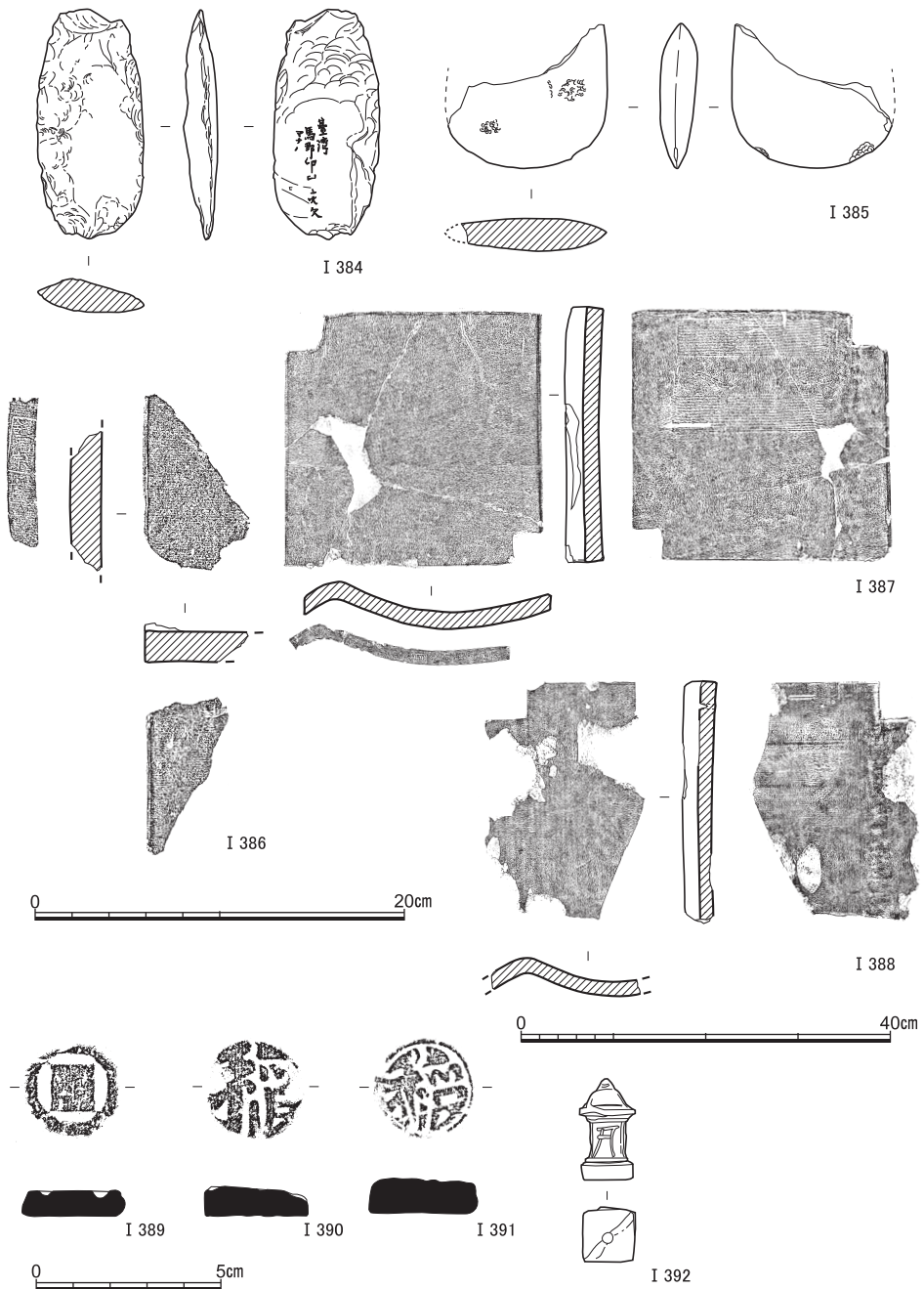


図29 表土・攪乱出土遺物(5) (I 384打製石斧, I 385磨製石斧, I 386~I 388瓦, I 389~I 392土製品) I 387・I 388は縮尺1/8, I 389~I 392は縮尺1/2

の磨製石斧。これらについては後述する。

I 386は燻瓦。側端面に、四角で囲まれた「請合／尾宗」の刻印がみうけられる。I 387・I 388は椀瓦。前者には頭部の側端面に四角で囲まれた「西川」、後者には凸面に枠囲いの「□七」の刻印が存する。

I 389～I 392は土製品。I 389～I 391は泥面子の中型の面打。I 392は箱庭道具。

6 小 結

(1) 同地における土取りの時期

今回の調査では、調査区の全面において、茶褐色土を埋土とする不定形土坑が広がっている状況を認めた。調査区全体に広がる黄灰色シルトの掘削を目的としたものであったと思われる。よって、同地における土地利用の変遷を判断するためには、まずは、同地において土取りがいつおこなわれたかを把握しなければならない。そのために、土坑の埋土の下半から出土した遺物、土取りによる破壊を免れた遺構、土取り後に形成された遺構、の三者の年代を確認した。

まず、土坑埋土下半から出土した遺物からは、地区ごとに遺物の年代が異なる。調査区の東半、およそY = -20250以東において18世紀に下る遺物を含む近世の遺物が一定量出土する一方で、西半においては近世の遺物はほとんど認められない。ただし、いくつかの地点で少量ながら近世のものと思われる遺物が出土したから、調査区の西半にも近世の土取りが及んでいたものと思われる。いずれにせよ、近世遺物の出土量は東半ほどではなく、東半の不定形土坑がより新しい時期におこなわれた土取りの痕跡であることが想定される。これらいくつかの地点を除くと、西半においては中世以前の遺物ばかりが出土した。基本的には出土遺物の中にF類の土師器が含まれていることから、F類の時期、つまり、15・16世紀頃の年代が与えられるが、AL19d5区においては、最も新しい時期の土師器はE類のものであった。これは土取り穴の掘削が、E類の時期、すなわち14世紀にはすでに開始されていたことを示唆する。

次に、土取り以前に形成された遺構、すなわち不定形土坑による完全な破壊を免れた遺構を見ると、12世紀頃のSX4、13世紀頃のSX5・SX64、14世紀頃のSX61などの遺構が確認される。14世紀のある時点では同地がまだ土取りの対象とされていなかった可能性を示している。

そして、土取り後に形成された遺構、すなわち、不定形土坑の埋土を削るようにして形

成された遺構の中には、S X 2・S X 3のような14世紀の土師器溜が含まれる。このような遺構の存在が示すのは、土取り穴の中には、14世紀以前に掘られたものが含まれていることである。

以上の三者の年代を踏まえるならば、同地における土取りは、14世紀のうちに開始され、18世紀に至るまでおこなわれたことになる。同地が長期にわたって土取りの対象とされていたことが分かる。

(2) 土取り以前の土地利用

既述のように、今回の調査区においては全面で土取りがおこなわれたため、土取り以前の遺構はほとんど残存していなかった。しかしながら、わずかに土取りによっては完全に破壊されなかった遺構も確認された。重要な遺構として、縄文時代後期頃に形成されたと考えられる自然流路S R 2・S R 3、12世紀の土師器が大量に出土したS X 4、13世紀の土師器がまとめて出土したS X 5、13世紀頃に形成されたものと思われる井戸S E 4、14世紀頃の鑄造にかかわる遺構である可能性のあるS X 61などがある。

同地が鑄造にかかわっていた可能性が高いことは、出土遺物からも説明することができる。なぜなら、不定形土坑の埋土などから、鑄造にかかわるものと考えられる遺物が多量に見つかっているためである。とく、今回の調査で計60kg以上の重量をなす鉄滓がまとめて出土している点は注目される。また、1点の鑄型片は、本調査区の南東に隣接する169地点で出土した六器の鑄型片と同様のものではあったが、それとは異なる2種類の鑄型が出土したことも特筆される。一方は華瓶の外型と考えられるが、もう一方の内型については、そこから鑄造される器物が何か分からなかった。これら、鉄滓や鑄型の他にも、ふいご羽口片、焼土塊、鉄製品も多量に出土した。なお、土取り以前のものとして残存していた鑄造にかかわる可能性のある遺構は14世紀頃のものであるから、同地では14世紀時点において鑄造がおこなわれていた可能性が高い。

土取り以前の土地利用にかかわり、もう一点注目すべき点は、不定形土坑埋土の中から現れた大量の集石である。集石の分布は調査区南部から北北東へ延び、それが垂直に曲がって西北西へ続くように見受けられた(図版3-2, 図17)。これらの集石は、土取り穴の埋土の中に含まれており、二次的な堆積にすぎないが、このように石を大量に用いる施設が、集石が検出された地点の周辺に、土取り以前に存在した可能性がある。同地で12世紀後半にかかる土師器溜が見つかることも考え合わせ、これらの集石が未だに発見されるに至っていない福勝院とかかわる可能性は、やはり想定されるべきであろう。

(3) 近世後半以降の耕地について

まずは、土取りに関して、私見を簡単に述べると、その大半は、近世前半におこなわれたものであろう。第4層の茶褐色土上面では、土取りの対象であった第6層の黄灰色シルトが散見した。こうした点などを踏まえると、もともと茶褐色土上面の標高の辺りで、黄灰色シルトがかなり露わになっていたのが推量される。察するに、茶褐色土は、土取りが終わった後に、本調査区の近くから運ばれたものが多かったのではなかろうか。くわえて、集石の礫もまた、鴨川の河原などから移されたものが少なくなかったと臆測される。集石をめぐっては、農作の便宜を図ったが故のものであったかもしれない、よって、そうした点についての吟味が求められているといえよう。

茶褐色土などを用いて土地がだいたいならされて以降、近世後半には、本調査区は、耕地となった。それは、おそらく畑であろう。検出された段差を前提にすると、①おおよそX=1212以北・Y=2014以西の範囲、②後者とその延長ラインの東側の範囲、③延長ラインの西側の範囲に土地が区分しうると考えられる。

ここで、近世後期の様相を示す『山城国吉田村古図』（京都大学総合博物館所蔵）と照らし合わせると、①が「弥勒 拾四番 五畝 豊後」、②が「弥勒 拾番 五畝 豊後」、③が「弥勒 拾壹番／壱反／河内」に該当すると思われる。それらに共通する「弥勒」が小字名、1つ目のものがおおむね東西に、2つ目のものがおおむね南北に長い土地、3つ目のものがおおむね逆台形を呈する土地である。

以上のような耕地の区画は、土層に基づくと、明治時代になってもうけ継がれていたことが想定される。

(4) 打製石斧と磨製石斧について

I 384の打製石斧とI 385の磨製石斧は、重機による表土掘削の際に、本調査区の北西隅のところから見つかった。その辺りには、近代の遺物が多く認められ、それらは、打製石斧と磨製石斧を含めて、廃棄されたものであったと考えられる。

I 384の打製石斧には、「台湾」から書き出す注記がみうけられる。その次の行の1字目は、「馬」で間違いなく、また、終わりの2文字は、「大欠」とみなしてよいだろう。しかるに、にじんでしまっているところが存し、それゆえに、肉眼で読み解くことは、なかなか難しい。とはいえ、注記には、打製石斧が出土した場所が書き入れられている公算が大きく、したがって、それは、台湾の遺跡から見つかった遺物であるのは、まず誤りなからう。そして、I 385の磨製石斧には、割れてなくなった部分に注記があって、同様に国外

小 結

の遺跡から出土した遺物であった可能性も否定することができまい。

I 384の打製石斧とI 385の磨製石斧は、表土を除去する過程で、たまたま拾いあげられたものである。もとより、それらの他に、注記を有する国内や国外の貴重な遺物が混ざっていた場合も十分想定される。

今後は、I 384の打製石斧の注記の釈読に努めるとともに、それとI 385の磨製石斧の石材を吟味するなどして、これらの出土地点の絞り込みをおこなっていく必要が存する。くわえて、そのような大切な遺物がどのように入手され、どこで保管され、そして、どうして捨てられるにおよんだのか等、こうした点をめぐっても検討を深めていくことが不可欠になると考えられよう。

本章は、第1節～第4節・第6節(1)・(2)を内記が、第5節・第6節(3)・(4)を笹川が執筆した。発掘調査と整理作業にあたっては、長尾玲、西田陽子、磯谷敦子、高野紗奈江、河野葵の補佐を得た。また、集石の測量にあたっては、山口欧志氏（奈良文化財研究所）にご協力をいただいた。そして、不定形土坑から出土した黒織部の考察にあたっては、柴垣勇夫氏より助言をいただいた。記してお礼申し上げます。